

《口短調ミサ曲》とバッハ研究：

作品の伝承と楽譜編集史からみる研究上の諸問題¹

富田 庸

はじめに

《口短調ミサ曲》は、バッハ研究者の「永遠の試金石」である——これはバッハ研究の大御所ともいわれ、この曲の研究にも重要な貢献をしてきたハンス・ヨアヒム・シュルツェの名言である²。バッハはなぜ《口短調ミサ曲》を書いたのか。演奏予定はあったのか。誰かから依頼された作品だったのか。これらの素朴かつ根本的な疑問に対し、これまで多くの研究者によって様々な角度からのアプローチが進められてきたにもかかわらず、未だに決定的解明がなされることもなく、今日も熱い研究対象として私たち研究者を魅了し続けている。

数々のアプローチのなかでも近年特に注目を集めてきたのは、オリジナル資料の研究である。手書きの楽譜というものは、純粋に音楽が紙に記録されているというだけではなく、楽譜が書かれたときの状況を示唆したりすることもあれば、楽譜中に確認できる変更箇所から曲がどう変化していったかという変遷過程も学ぶこともできる。また、書き手の筆致の解析や、紙やインクなどの分析からは独自の年代研究も進めることもできる。そして各研究が到達した分析結果を総合的に見直してみれば、極めて重要な真実——例えば、第2部の《ニカイア信条》以降は、バッハ最晩年に追加分として書かれた楽譜であったのであり、そこには後に次男カール・フィーリップ・エマヌエル・バッハが書き込んだ数多くの変更箇所が見られる等——が見えてきた。つまり、手書きの楽譜資料の中にこれまでは知り得なかった重要な歴史的眞実が未だに隠されている可能性がある。この分野の研究を土台にして、私たち研究者は、次の段階の質問——つまり、バッハは何を意図してこの作品を書いたのか、彼の周辺では何が起こっていたのか——に取り掛かることができるのである。

バッハの楽譜は、研究者にとってとりわけ大切な一次資料としての情報源であることに加え、演奏家や楽譜編集者にとっても、単に記譜されている作品以上の有益な情報を持ち合わせている。18世紀の記譜法と楽譜作成の手順には、当時なりの習慣と理由があった。それを現代譜に書き換えてしまうと、当時の楽譜が醸し出していたある種の「音楽の香り」が消されてしまうということが起こる。付点リズムの記譜や、連符、それに臨時記号の付け方などはその典型的な例であろう³。

元来、楽譜というものは、音楽をできるだけ合理的にかつ効率よく記録しようという理念のもとで作成される。バッハの作曲譜の場合には特にその傾向が強くみられ、演奏される音楽のイメージを完全に伝えている。しかし、明確には伝えられなかった部分でも、書き手（作曲家）やその周辺の音楽家

の間では、相互理解ができていたはずで、演奏家の自由に委ねられていた表現様式もそこに含まれていたと考えるべきであろう。バッハが浄書譜を作成する場合、細かいリズムの指定やアーティキュレーション、運弓法など、かなり詳しい演奏指示を併せて記譜しようと努める傾向があったのは、単に時間的余裕があったからということではなく、後に自分以外の者がスコアを見ることを想定してのことだとも思われる⁴。現存する《口短調ミサ曲》の自筆譜スコアは、浄書譜では無いため、演奏者にとってはつきりしない部分が大いに残ってしまったのは残念である。

バッハの死後も、彼の多くの作品は、主に弟子や支持者らによる筆写譜を通じて後世に伝えられていった。《口短調ミサ曲》もその例外ではなかった。筆写譜の作成というのは、モデルとなる楽譜を機械的に写してゆくのではなく、より読みやすく整えられた楽譜になる場合が多く、それは筆写者の記譜観と音楽観から少なからず影響を受けている。《口短調ミサ曲》の自筆譜スコアのように、判読の難しい箇所が含まれるものなどは、筆写者が憶測で「作曲」した所もあるのが普通だ。筆写が重ねられてゆくにつれ、過ちや更なる憶測による修正は増えてゆく。既に述べたように、バッハの次男の手による大胆で広範囲に渡る書き込みも、この曲の伝承の特徴となっている。

《口短調ミサ曲》の出版譜は1833年に初めて現れ、その後も多種多様の楽譜が出版されて今日に至っている⁵。この氾濫とも言うべき《口短調ミサ曲》の出版譜群は、私たち自身の楽譜の選択と作品理解・演奏解釈にどのような影響を与えてきたのだろうか。またこの知識の蓄積を私たちはどう役立てることができるのだろうか。

楽譜観とは

「楽譜観」という言葉は一般に使われていないかもしれない。いわゆる音楽の研究や演奏に長年携わっている人であれば誰もが持つ、楽譜に対する見識と入手の心得というべきものを指し、それは過去の経験から得た知識の積み重ねにより形成される。そこでは、楽譜に何を期待するのか、そして何が学べるのか、という問題意識を常に持ち続けることがとりわけ大切となる。それによって楽譜の選択肢が自ら決まってくるからである。

一般的に、楽譜を選ぶポイントとして挙げられるのは、編集者や出版社の知名度と、譜面の見易さ、ページ捲りの問題をどう処理しているかなど、演奏における使い易さであろう。さらに踏み込んだ研究を目指す場合は、楽譜資料からの情報が読み易く提供されていて、それらの情報を編者がどう処理したのかということも明らかにされている批判校訂版も参考資料として入手したいし、その他にも、楽曲分析が施こされている楽譜や、手稿譜資料の情報が前面に出されているものも便利だ。以上のようなことは、いたって日常的に見られるかと思われるが、楽譜との本当の付き合いは、ここから始まるのであって、そこから楽譜観が育つ。

楽譜には、編集者と出版社の目から見て大切だと感じた数々の主張が含まれている。それは出版当時画期的と捉えられていた視点であったり、従来の楽譜に対する不満であったりするが、なんらかの歴

史的必然性が背後に存在していたことを忘れてはならない。古い出版譜を見る場合には、その歴史的文脈を採った上での評価が必要となる。つまり、楽譜を作成者側の立場に立って検討してみるということである。楽譜を歴史的資料として評価するとき、作品の理解が時代によりどう変遷してきたのかということが見えてくる。これが、いわゆる「出版譜研究」である。

演奏者にとって、これから準備に真剣に取り組もうとしているときの楽譜の選択には注意が要る。この選択は、練習の成果に少なからず影響を与えるであろう大切な決断である。楽譜観という見識を養うためにも、まずどのような楽譜が存在するのかを調べ、入手が容易なものから収集を始めたい。そこから見えてくる各出版譜の辿った歴史と演奏史への貢献を顧みることによって、自分がこれから取り組む演奏の新しい意義の発見へと繋がってゆくであろう。その知識の下積みは、確固とした楽曲解釈の礎となり、演奏者に自信を与えてくれるものと思う。

楽譜観と楽譜研究

楽譜観という漠然とした概念を、音楽学的なアプローチに当てはめて言えば、それは資料研究と受容史研究の間のある程度重なった領域として捉えることができる（図1を参照）。

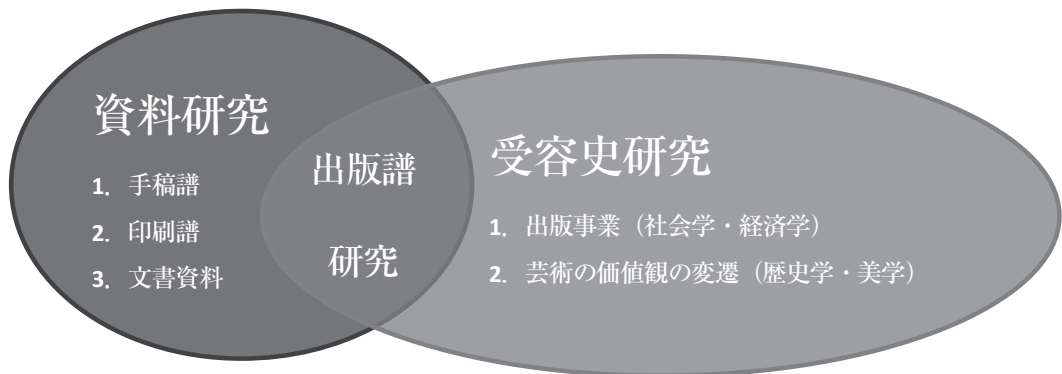


図1：出版譜研究の位置づけ

出版譜の作成は、資料研究から始まる。そこでは、楽譜の作成に必要と考えられる資料が収集され、それを体系的かつ批判的に吟味してゆく過程を通して、音楽作品の起源が明らかにされ、作曲家が意図した形での作品を「今」の音楽家が正しく理解し演奏できるような形に記譜し直される。当然ながら、作曲者の意図を完全に理解できるだけの情報や知識を得ることは不可能なのだが、それと同時に、今日では当時の記譜においては記入されずして広く理解されていた演奏上の常識という、一種の伝統が失われてしまったことが問題を複雑にしている。つまり、現代の出版譜は、少なくとも、作品の理解と記譜という二つの大きな課題を抱えており、実際にはいわば不可能への挑戦であるということをお大前提の上

で謙虚に進められるべき作業なのである。また、《口短調ミサ曲》のように、複数のオリジナル資料が存在し、作曲者であるバッハの意図が各稿それぞれ独自に反映している場合には、複数の稿に纏わる複雑な問題を処理せねばならず、後述のように最終的に一冊の楽譜にどう収められるかが問われる。

一方、受容史研究は、バッハ像の変遷を歴史の文脈から捉え直すアプローチである。バッハ時代の音楽観は次世代の音楽家による演奏と解釈ではどう変遷していったのか、その背景と歴史的意義を同時に追ってゆく。音楽家の生きる社会や芸術としての価値観の変化は、演奏記録や出版譜といった「資料」にも反映している。そのため、出版譜研究は、資料と受容の双方の領域に根を下ろしつつ、出版譜という資料に主な焦点を当てる研究といえる。

バッハの作品は、後の世代の音楽家の精力的な啓蒙活動から様々な影響を受けてきた。それらは作曲当時の演奏形態を離れ、19世紀のコンサートホール新時代でのレパートリーへと進出することになる。メンデルスゾーンが演奏した《マタイ受難曲》のように、曲の構成自体が変わってしまったものも少なくない。バッハのカンタータやミサ曲も、抜粋されたアリアとして1820年代後半からコンサートプログラムに頻繁に登場してくようになる。1840年頃には、バッハのクラヴィーア曲は、ロマン派のピアノ曲と同様、強弱やアーティキュレーションが満載された「ピアノ曲」として生まれ変わっていた。現在私たちが知るバッハの作品の多くは、19世紀、そして20世紀の音楽家それぞれのバッハ像を通して伝えられた伝統に少なからず影響されている。それは、近年見直されてきた18世紀の演奏実践の研究がいくら進んだとしても、演奏実践は完全に変わることは無い。中世から現代曲まで多種多様のレパートリーに耳慣れた私たちが、バッハの時代の聴衆が受けたであろう斬新で驚嘆すべきインパクトを同じように捉えることができないであろうと思われるからである。

概して、出版譜には、その楽譜を使用した音楽家がどのような演奏解釈を行ったかを探るうえで参考になるであろう様々な基礎情報が含まれている。更に踏み込んで言えば、その音楽家はその出版譜を選択することになった背景——例えば、当時の楽譜資料の状況と扱い方、当時のコンサートプログラムの構成に見られる流行など——を探りあてるための情報も持ち合わせていると考えるべきであるし、当時の様々な歴史的様相も反映していると仮定して考察を進めるべきだと考える。そして、それらを正確に捉えようとするにあたり、出版譜の流通過程やその背景をミクロ的視点から考察することと、その受容の形態や歴史の流れをマクロ的視点から評価することの両方が必要となる。つまり、出版譜を体系的かつ包括的に整理し見直すことは、バッハ受容史研究の根幹をなす問題に繋がるということにおいて、決して無視されるべきではない重要な研究領域であるが、研究自体はあまり進んでおらず、将来の進展に期待したい。

本論では、まず現在入手可能な《口短調ミサ曲》の楽譜を例にとり、楽譜にはどのような種類のものが存在するのか、また、それぞれの楽譜の意義や主張はどこにあるのかといった、楽譜観の道しるべとなりうるところから入ってみたい。続いて、現在のバッハ研究が究明できた《口短調ミサ曲》の成立史を再考し、オリジナル資料に見られる問題点挙げ、最後に《口短調ミサ曲》の出版譜は、1833年の初

版から現在まで、どのように理解され編纂されてきたのかを、この曲の研究の軌跡と合わせて論じてみたい。そこから浮かび上がる研究上の諸問題に対し、将来のバッハ研究はどう向き合うべきかというビジョンも見えてこよう。

楽譜の種類と選択肢

現在、私たちが入手可能な《口短調ミサ曲》の楽譜は、一般的には、楽譜店などで購入可能な現代譜（Modern Edition）とそうでないもの、つまり著作権が既に無い19世紀の歴史的楽譜類（Historical Edition）とに分けて認識されている。後者の代表的なものは、旧バッハ全集（1851 - 1899）だ。古本専門店などでは今でも入手可能であるが、最近はIMSLPなどから無料でダウンロードできるものも多い⁶。

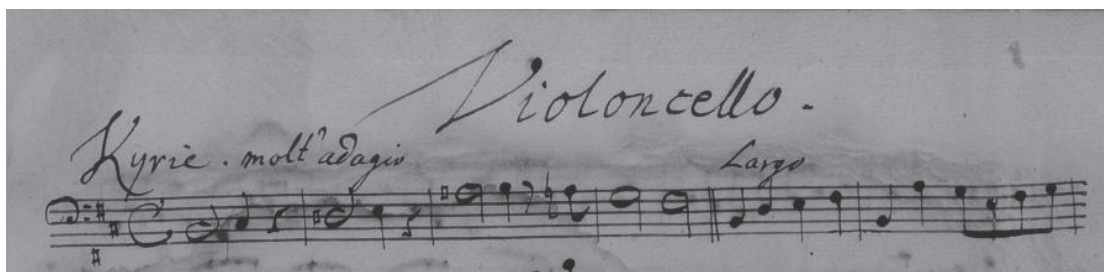
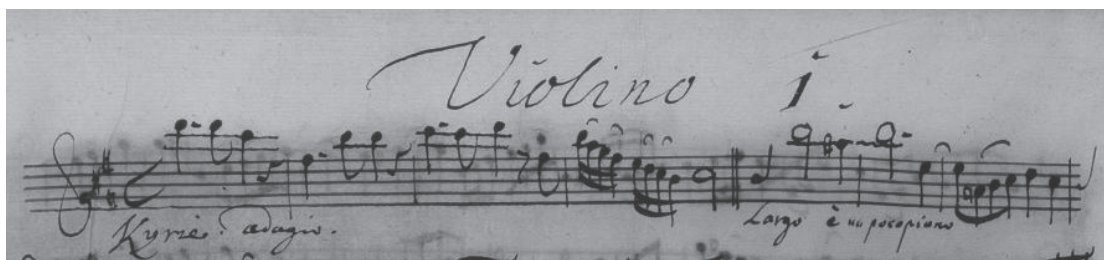
新しい楽譜は、当然ながらそれなりの理由があって出るわけで、楽譜観のある人にとっては、新譜のニュースは興味のあるところだ。しかし、必ずしも新しいものが古いものよりも良いとは限らない。特に楽譜作成時に混入する誤植は、新旧を問わず、必ず問題として浮上する。当然ながら、誤植への対応は出版社によって大きく差がある。既に述べたように、古い出版物は当時の演奏習慣や出版事情がある程度反映しているので、そこを正しく理解した上で評価されるべき資料として捉えるべきであるが、現在でも実用において問題の無いものが多いのも事実である。

楽譜の種類を議論するのも二通りの見方がある、どのように編集されたかというアプローチと、演奏用途を考慮した実践用の形態を指す場合とがある。前者では、新バッハ全集のような、研究者が作成にかかわった批判校訂版（Critical Edition）が理想的とされる。この類の楽譜は、現存するすべての楽譜資料の調査を通して、複数の稿と異型を明らかにし、それらを厳密に考慮したうえで作成される。出版後に新しい資料が発見されると、内容の更新が余儀なくされることもある。一昔前のスタンダードであった原典版（Urtext Edition）といわれる楽譜は、批判校訂版ほど詳しい資料解説が添えられては無いが、実質的には同じものである。両者とも、作曲者が記譜しなかった演奏表現記号などの補足は行わないが、現在の音楽家が読みやすいように、音部記号を統一したり記譜自体を整えたりという程度の軽い介入はなされている。そこでの編集者の役割は、演奏者が作曲家の意図を感じて読み取るための手引きとしてのサポーターと形容できよう。一方、実用版（Performance Edition）というものは、編集者がテンポ、強弱記号、フレーズなどの演奏記号を追加している楽譜で、編集者の主観による楽曲・演奏解釈を演奏者に強いる。演奏者が独自の解釈を希望せず、編集者にそれを委ねたい場合には、重宝できる楽譜であるが、自分の演奏様式を確立したいと考える場合には、作曲者と編集者の意図の区別が難しいため、薦められない。

楽譜の種類に関するもうひとつの見方は、実践という見地からみたもので、バッハの時代から存在していた観点である。まず、バッハは作曲するときに、スコア（総譜 Full Score [英]・Partitur [独])を書き上げた。その後、演奏の準備が進められ、各パート譜が作成された。後者には、スコアには書か

れることの無かった演奏記号が追加記入されることも多かった。演奏時には、パート譜を演奏者たちに配布し、バッハは最初に作成したスコアを使ってそのまま指揮をしたと考えられている。ちなみに、《ロ短調ミサ曲》の前身となった《ミサ曲》(1733年)のパート譜は、《ロ短調ミサ曲》のスコアの第1部から直接書き出され、バッハが詳しい演奏記号を書き入れたものである。譜例1と2にて、バッハのスコアとパート譜に見られる代表的な違いを示す。

譜例1：〈キュリエ〉I 冒頭部—パート譜に見られるテンポ指定

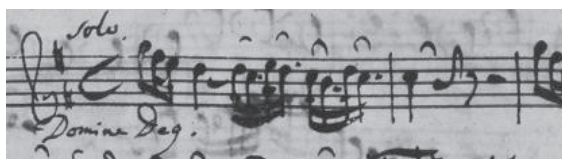


楽器群のパート譜では、*adagio* と記されているが、チェロ・パートのみ *molt' adagio* と記されている⁷。スコアにはテンポの指定は無い。

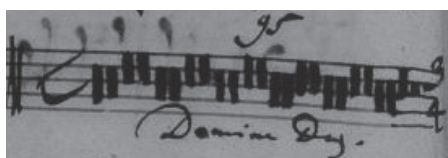
譜例2：〈ドミネ・デーウス〉冒頭部—バッハの自筆譜スコアとフルート・パート譜



スコア



第1フルート・パート譜



第2フルート・パート譜

逆付点リズム（ロンバルディア・リズム）が第1フルート・パートのみにて記譜されている。スコアにて見られる楽器指定（「フルートはユニゾンで奏す」）とパート譜（第1フルートの「ソロ」として指定されている）では違っているところに注目。

このスコアとパート譜の関係は、現在も継続されているが、実際には、様々なヴァリエーションが生まれてきた。たとえば、指揮者や研究者は現在もスコアを使うが、20世紀初頭から勉強用に携帯に便利なミニチュア・スコア（Study Score / Student edition / Studienpartitur / kleine Partitur）というもの出てきた。19世紀の中ごろには、ピアノ伴奏付き合唱譜（Vocal Score / [Chorpartitur], [Piano Reduction] / Klavierauszug）という楽譜が作成されるようになり、徐々に広く使われるようになっていった。当初は、オーケストラの代わりにピアノ伴奏で演奏をする機会が増えたことにより広まったと思われるが、19世紀の後半には、次第に歌手用のパート譜も徐々にピアノ伴奏付き合唱譜にとって代わられていった。ピアノ伴奏付き合唱譜は、それ一冊だけで曲全体を大雑把に把握することが出来るという利点を併せ持つため、19世紀末期から20世紀にかけ、市場に大量に出回り、現在に至っている。

《口短調ミサ曲》の成立・受容史の概略

バッハのスコアとパート譜の関係は、多少補足を必要とするので、図2に概要を示しておく。

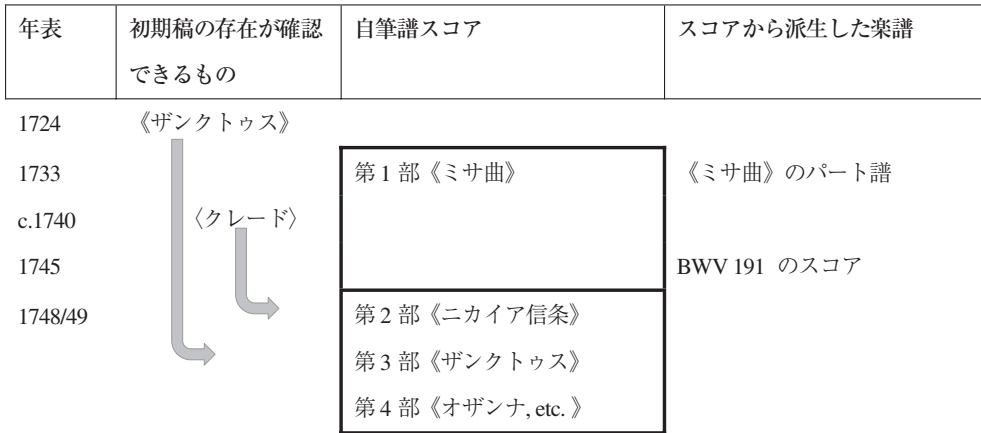


図2：《口短調ミサ曲》のオリジナル資料と関連資料との相互関係

《口短調ミサ曲》の自筆譜スコアは、第1部の《ミサ曲》と、第2部から第4部までの残り部分が異なった時期に書かれている。前者は1733年の初夏までには書き上げられ、ドレスデン宮廷作曲家の称号を請うにあたり、そこからパート譜が作成され、同年の7月末にドレスデンの選帝侯に献呈された。つまり、スコアはバッハの手元に残ったが、パート譜は宮廷の図書館へ入ったきりになったため、後にカンタータ第191番『いと高きところには神に栄光あれ』を上演する際には、使うことができなかった。スコアの後半部分は、バッハ最晩年の1748/49年頃に書き上げられたと考えられているが⁸、パート譜は作成されなかったようだ⁹。弟子のアグリコラの手による筆写譜から伝えられる〈クレード〉の初期稿¹⁰（ミクソリディアG）や1724年のクリスマスに演奏された《ザンクトゥス》の存在から¹¹、スコアの作成にあたりバッハは自分が過去に作曲した幅広いレパートリーから適切な楽曲をモデルとして使ったと推測されているが、これらの多くがパロディーであったことも既にスメント¹²やデュル¹³によって指摘されている¹⁴。

第2部の《ニカイア信条》のスコアを書き上げたバッハは、ひとつの大きな変更を決断した。初稿では〈エト・インカルナートゥス〉のテキストは、〈エト・イン・ウーヌム〉の二重唱の後半に含まれていたが、〈エト・インカルナートゥス〉に独自の楽章をあてがう決心をしたのである。バッハは一枚の半紙をとり、その表裏に新しい合唱楽章を書き上げ、その前後の〈エト・イン・ウーヌム〉と〈クルツィフィクスス〉の間に挿入した。その際、初稿の〈エト・イン・ウーヌム〉の二重唱の部分は消したり注を入れたりせず、第2部の最終楽章の後に、エト・インカルナートゥスのテキストを除いた〈エト・

イン・ウーナム〉の二重唱部分を補足として書き添えた。このスコアは、以上の修正過程を私たちに示してくれるという点において、とても貴重な資料である。しかし、この稿から筆写譜や出版譜を作成した後の世代の編集者の中には、スメントを含め、バッハの真意をとり間違える者もいたのである¹⁵。

このバッハ最晩年の作曲活動にて表面化してくるもうひとつの問題は、視力の弱化と手の動きの障害という健康面の心配が出てきたことだ。特に第2部《ニカイア信条》には、ぎこちない筆跡と共に、記譜上の勘違いや大規模な修正が多く見られる。もっともまだ若かった時代の楽譜にも、問題が無かったわけではない。例えば、スコアの第1部《ミサ曲》に添えられた表題には、〈クヴァーニウム〉にて必要とされるファゴットとコロノ・ダ・カッチャ（ホルン）が書き忘れられており、コンティヌオとしてのファゴットは本当に〈クヴァーニウム〉のみにて必要と認識していたかどうか、疑問が依然と残ったままである。このようなうっかりミスともいえる欠陥は、パート譜の表題（パート譜を纏めて保管する包み紙の表紙に書かれた）にも見られ、そこではなぜかヴァイオリンとヴィオラの記載が欠けていたばかりか¹⁶、各パート譜に付けられた楽器名と、表題に添えられた楽器編成のそれとも異なっている。この違いは、何を私たちに伝えてくれているのであろうか。表1にこの情報を纏めてみた。

パート譜の表題は、シュルツェによれば、ドレスデン宮廷に仕えていたゴットフリード・ラウシュ（Gottfried Rausch, d.1752）の手による浄書であり、添えて提出した献呈文と一緒に作成してもらったものと推測される¹⁷。ラウシュの記述では、バッハのパート譜に付けられた楽器名とは異なった言語で書かれているところが興味を引く。単にドレスデンの宮廷音楽文庫で使われている楽器の呼び方に沿って統一されたのであろうか。

ヴァイオリンの重複譜が唯一長男のフリーデマンによるもので、かつラウシュがヴァイオリン群を記していないところは¹⁸、何らかの因果関係がありそうに思われる。シュルツェは、このフリーデマンの手による重複譜は、ヴァイオリンのトゥッティ Tutti パートであること、他のパート譜とは違う紙に記されているという事実、そしてバッハの手による第一ヴァイオリンでは、〈ラウダームス〉の独奏パートが書かれていたという点に注目し、この曲が当時ドレスデンで演奏（もしくは試奏）された可能性を読み取っている¹⁹。

また、既に譜例1で観察したように、チェロのパート譜にて他のパート譜とは異なるテンポ記号が与えられていたり²⁰、譜例2で示したように、スコアで指示した二つのフルート・パートをユニゾンとして扱うのではなく、パート譜では第1フルートのみ、つまり名手ブッフアルダン（Pierre-Gabriel Buffardin, 1690-1768）の独奏に変えたことなどを考慮すると、バッハがドレスデン宮廷楽団の面々を考慮して書き上げた楽譜であったことも察せられる²¹。約15年後に、バッハが《ロ短調ミサ曲》を再構想するにあたり、ドレスデン・パート譜にてカスタマイズをしたこれら変更は、普遍性を追求した最終稿においては、無視されるべきものと考えていた可能性すら感じさせる。

表 1 : オリジナル・パート譜に見られる表題と筆写者

パート譜自体に付けられた楽器表記	表題紙における楽器表記 (Rausch による)	パート譜の書き手
[1] Soprano I	[1] 2. Soprani	CPEB が写譜, JSB が仕上げる
[2] Soprano II		CPEB が写譜, JSB が仕上げる
[3] Alto	[2] Alto	JSB
[4] Tenore	[3] Tenore	JSB
[5] Basso	[4] Basso	JSB
[6] Clarino 1	[5] 3 Trombe	JSB
[7] Clarino 2		JSB
[8] Principale		JSB
[9] Tympana	[6] Tympali	JSB
[10] Corne da Caccia	[7] Corne da Chasse	JSB
[11] Traversiere 1	[8] 2 Traversières	JSB
[12] Traversiere 2		JSB
[13] Hautbois. 1. d'Amour	[9] 2 Hautbois	Anon.20 が写譜, JSB が修正し、拡張
[14] Hautbois d'Amor. 2.		同上
[15] Basson	[10] 2 Bassoni	JSB
[16] Violino 1	[0: Morgenroth が後に追加]	JSB
[17] Violino 1 (重複譜)	3 [2 から修正] Violini.	JSB (表題のみ), WFB 残り全て
[18] Violino 2		JSB
[19] Viola	[欠落]	JSB
[20] Violoncello	[11] Violoncello	AMB (楽譜部分のみ), JSB (文字)
[21] Continuo	[12] Continuo	Anon.20, JSB が数字を付加して仕上げる

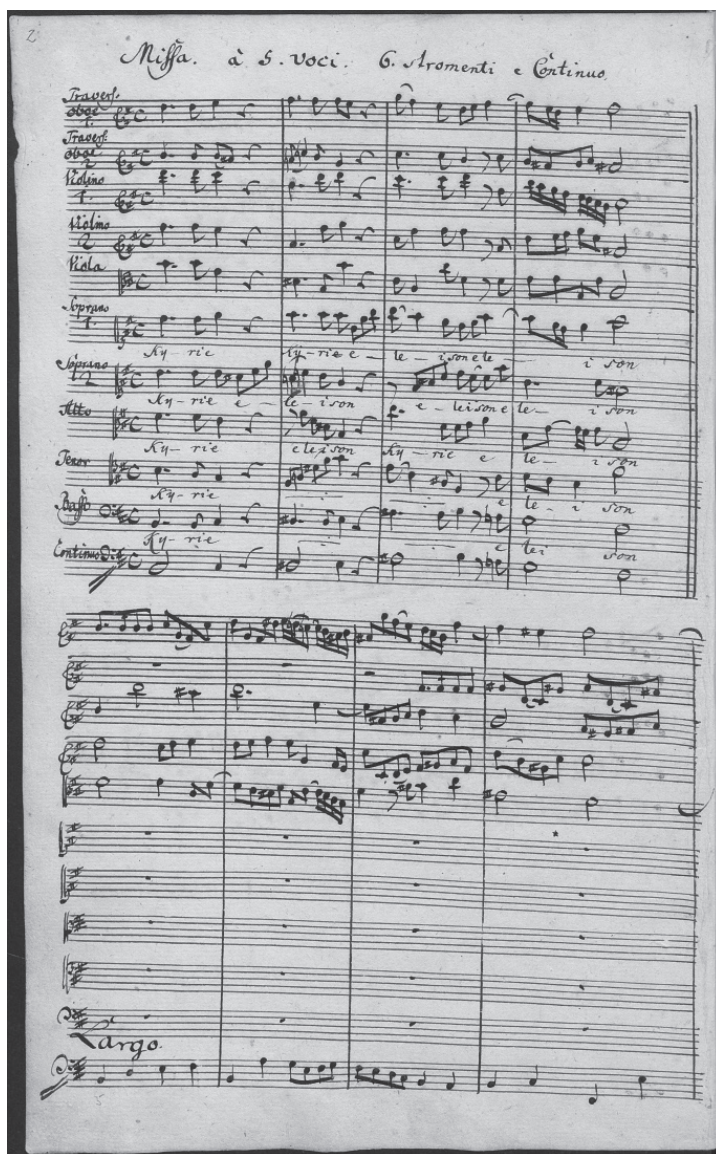
注：角括弧の数字は、資料中に現れる順番を指す。CPEB = Carl Philipp Emanuel Bach; JSB = Johann Sebastian Bach; AMB = Anna Magdalena Bach; WFB = Wilhelm Friedemann Bach; Anon.20 = 匿名筆写者 20

《口短調ミサ曲》の受容史：筆写譜を通じての伝承から出版譜へ

C.P.E. バッハの受容への貢献と影響

バッハの死後、《口短調ミサ曲》の自筆譜スコアは、次男のカール・フィーリップ・エマヌエルが相続したようだ。このスコア全体のコピーで現存中最古のものは、ヨハン・フリードリヒ・ヘリング (Johann Friedrich Hering, 1744–1810) の筆写譜で、エマヌエル・バッハのベルリン時代の末期 (1763 年から 1768 年の間) に作成されたと考えられている。作成にあたりエマヌエル・バッハと無名の筆写者

が少し関わっている²²。もう一つ、初期の重要な資料で、後に作品の伝承に大きく貢献したのが、キルンベルガーが所有していた筆写譜である²³。この楽譜は、1769年の7月にハンブルクへ移ったばかりのエマヌエルから郵送してもらったバッハの自筆譜スコアから写譜したもので、ベルリンの無名の筆写者 Anon.402 の手による（譜例3を参照）²⁴。



譜例3：キルンベルガーの所有していたスコアの冒頭 (D-B, Am.B.3)

これら二冊の初期の筆写譜は、エマヌエル・バッハが父のスコアに細かい修正を施す前の形を読み取

る助けになるという意味で、研究価値の高い資料である。スメントは、これらの資料をバッハの生前のものであると結論づけ、彼の誤った解釈の原因の一つとなっている²⁵。

エマヌエル・バッハが、地元ハンブルクで行った1786年のチャリティー・コンサートにて、第2部《ニカイア信条》を抜粋し、自分が作曲した導入楽章とともにプログラム冒頭に入れた²⁶。この時の準備のためであろう、彼は父のスコアに直接インクとナイフで手をいれ、父の作品の細部を変えた。後にジョシュア・リフキンが、このテキストの問題に真っ向から取り組むまで、《ロ短調ミサ曲》はそのほとんどの場合、バッハ父子の合作という形で演奏され続けてきたのである。現在バッハのスコアは、幾層ものテキストの変更のため判読が不可能なところも数箇所存在するが²⁷、リフキンは上記の2冊の筆写譜に伝承されているテキストと筆跡、そして音楽様式の観点から、前世紀には聞かれることの無かったバッハの和声と書法の再現を試みている。

エマヌエル・バッハによる1786年の《ニカイア信条》の演奏は、大好評を博したようだ²⁸。この曲の筆写譜は、チャールズ・バーニー（Charles Burney, 1726–1814）を介してイギリス海峡を越え、18世紀末から19世紀初期にかけて、ロンドンの音楽通の間で崇められるに至る²⁹。1816年には、サミュエル・ウエスリー（Samuel Wesley, 1766–1837）が出版譜を出そうとするほどまで熱が入ったが、財政的に採算が取れる見込みが無かったことから挫折を余儀なくされた。また、エマヌエル・バッハの遺産からバッハ楽譜を大量に購入したベルリンの楽譜収集家のゲオルク・ペルヒャウ（Georg Poelchau, 1773–1836）も、出版を企んでいたことが知られている³⁰。

ネーゲリの初版譜とその周辺

ウエスリーの出版計画から2年後、スイスのチューリッヒにて出版業を営んでいた音楽家ハンス・ゲオルグ・ネーゲリ（Hans Georg Nägeli, 1773–1836）がシュヴェンケを通じて1805年頃³¹に運よく入手したバッハの自筆譜をもとに《ロ短調ミサ曲》を出版すると公表した³²。彼が第1部《ミサ曲》のスコアの出版にこぎつけたのは、偶然にもバッハがドレスデン宮廷への献呈からちょうど100周年記念の1833年で、その間に、ベルリンのツェルター（Carl Friedrich Zelter, 1758–1832）やフランクフルトのシエルブレ（Johann Nepomuk Schelble, 1789–1837）らが、筆写譜を元に既に演奏していた³³。

当時の出版業も、ライヴァルの動向に神経質になることもしばしばだったようだ。1801年《平均律クラヴィーア曲集》の初版出版時にライヴァルとして競ったボンのジムロックが、ネーゲリの思惑を見透かしたように、《ロ短調ミサ曲》の場合もジムロックも全曲の出版を独自に進めていたのである。バッハの自筆譜を所有するネーゲリは、自分にこそこの作品の著作権があると主張したが、最終的に両社は合意に達し、お互いの出版譜に相手の社名を併記することで落ち着いた³⁴。ネーゲリの第1部《ミサ曲》のスコアは、1833年の12月に（譜例4）、ジムロックの方は全曲（つまり第1部から第4部まで）をマルクス（Adolph Bernhard Marx, 1795–1866）によるピアノ伴奏付き合唱スコア版（譜例5）と合唱用のパート譜（5パート一組のセット³⁵、譜例6）という形で、翌年の1月に出した³⁶。

Die grosse h-moll Messe von J. S. Bach.

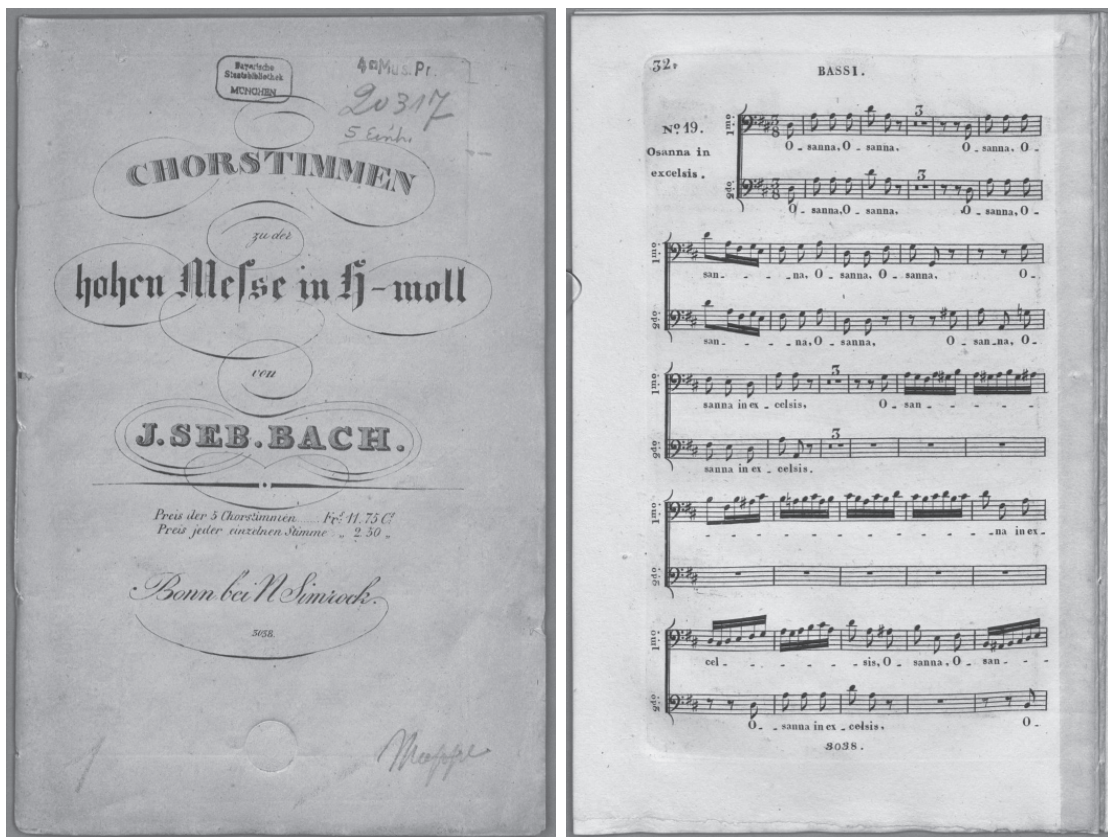
Largo. 1

Oboe e Flauto I
Oboe e Flauto II
Violino I
Violino II
Viola.
Soprano I
Soprano II
Alto.
Tenore
Basso.
Continuo.

Ky-rie, Ky-rie e-lei-son, e-lei-son.
Ky-rie e-lei-son, e-lei-son, e-lei-son.
Ky-rie e-lei-son, Ky-rie, e-lei-son.
Ky-rie Ky-rie Ky-rie e-lei-son.
Ky-rie Ky-rie, Ky-rie e-lei-son.

6.

譜例 4 : ネーゲリ版・スコア 第 1 頁 (初版, 1833 年 12 月)



譜例6：ジムロック版・合唱用のパート譜のカヴァー表題とバス声部のパート譜 第32頁（同年）

この当時の状況をモーリッツ・ハウプトマン（Moritz Hauptman, 1792–1868）は、バッハの楽譜収集家として名高かったフランツ・ハウザー（Franz Hauser, 1794–1870）へ1844年7月30日付けの手紙にて不満たっぷりに書いている：

親愛なるハウザー殿、

バッハの《ロ短調ミサ曲》を入手したいのですが、どうしたらよいでしょうか。キューリエとグローリアは〔ネーグリから〕出版されていますが、ひどい出来栄で、皆口をそろえて嫌っております。ウィーンでひとつ都合を付けていただければ、きちんと払いますので。メンデルスゾーンが《ミサ曲》〔のコピー〕を所有しているのですが、いつ返事をくれるのか、またベルリンへ戻ってくるのか…³⁷。

この「ひどい出来栄」がネーグリ版の小さくて混入った印刷（譜例4を参照）を指しているのか、

それとも誤植の多さを指しているのかは計り知れない。しかし、ネーゲリがモデルとした筆写譜のスコアは、もっとゆったりして見やすいものであったことが推測できる（譜例3を参照）ことから、筆写譜のレイアウトを知る者の批判が含まれていたのかもしれない。それよりも興味深いのは、《口短調ミサ曲》の素晴らしさが噂を呼び、演奏を渴望する者が増えてきたという事実である。

ネーゲリは残りの第2部から第4部までのスコアをできるだけ早く出版するよう、努力はしたようだが³⁸、結局出版されたのは、彼の死（1836年没）から9年後の1845年までずれ込んだ。その間は、オーケストラのパート譜は市販されていなかったばかりか、市販のスコアからパート譜を作成することもできなかったことになる。

音楽学者の主張としての楽譜

ネーゲリ版がようやく完成し、バッハの没後100周年の1850年になると、バッハ協会（Bach-Gesellschaft）が立ち上げられ、ライプツィヒのブライトコプフ & ヘルテル社から、いわゆる「旧バッハ全集」（Joh. Seb. Bach's Werke）が刊行されることになる。その頃、同じライプツィヒのC. F. ペーターズ社では、ツェルニー（Carl Czerny, 1791–1857）が独特の演奏解釈を加えた《平均律クラヴィーア曲集》を第1巻として立てて1837年に開始した独自の「バッハ全集」（Oeuvres Complets de Jean Sebastian Bach）を刊行していた。1850年には既に第14巻まで進行しており、既刊の改訂版も数度に渡り出されるほど進められていたし、既にイギリスやフランスの出版社との提携を取りつけ、世界市場のシェアを広げていた。また、「全集」という企画のほかにも、様々のシリーズが考案され、著名な音楽家の独特の主張がみられるアレンジ譜やポピュラーな楽章を抜粋した楽譜など、多種多様の楽譜が氾濫するようになり、販売部数も格段に増えてきた³⁹。

こうしたことを背景に現れた旧バッハ全集であったが、当時の楽譜の編集水準を高めるのに大いに貢献しただけでなく、バッハの全作品を網羅することにより、バッハ啓蒙の役割を担ったという点でも甚大な影響力を発揮した。創刊第6年目の巻に割り当てられたのが、ユリウス・リーツ（Julius Rietz, 1812–1877）編の《口短調ミサ曲》であった。これはオリジナルの再現（完成）を目指した《口短調ミサ曲》批判校訂譜の第1号（表2を参照）である。リーツ版の初版では、ネーゲリの息子が相続していたバッハの自筆譜スコアへのアクセスが拒まれていたため、キルンベルガーの楽譜を第一資料として編集されたが、出版直後に自筆譜へのアクセスが可能になり、バッハの自筆譜に書き込まれていた様々な追加情報（そしてその殆どが、エマヌエル・バッハの修正であったことを編集者のリーツは知らずに）をふんだんに取り入れた改訂版が作成され、翌年に出版された⁴⁰。その後一世紀の間、種々の実用版から「パクリ原典版」としか言いようの無いものまで、様々な出版譜が市場を賑わすが、本腰をいれた《口短調ミサ曲》の資料研究は、1937年のスメントの論文まで皆無であり、彼の手で編集された次の批判校訂版は、戦後になって新バッハ全集が刊行され始めた1954年まで待たねばならなかった。

表2：資料研究をもとに批判校訂された重要な出版譜

版の略称	編集者	出版シリーズ名と番号	出版社名	出版年
リート版	Julius Rietz	旧バッハ全集 Joh. Seb. Bach's Werke, VI	Breitkopf & Härtel	1856 (初版) 1857 (第2-4部の改訂版)
スメント版	Friedrich Smend	新バッハ全集 Neue Ausgabe sämtlicher Werke, II/1	Bärenreiter	1954 (楽譜) 1956 (校訂報告書)
C. ヴォルフ版	Christoph Wolff	Edition Peters, 8735	C. F. Peters	1997
リフキン版	Joshua Rifkin	Partitur-Bibliothek, 5363	Breitkopf & Härtel	2006
U. ヴォルフ版	Uwe Wolf	新バッハ全集改訂版 Neue Ausgabe sämtlicher Werke, reviderte Edition, I	Bärenreiter	2010

スメント版から C. ヴォルフ版まで

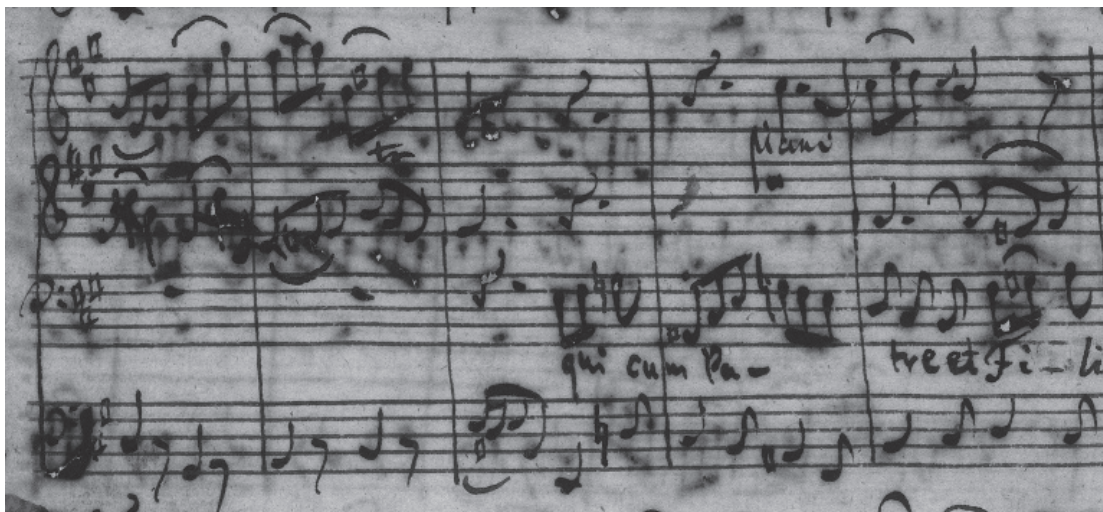
スメント版の批判と彼の研究への貢献に関しては、ゲオルグ・フォン・ダーデルゼンの書評を是非とも読みたい⁴¹。バッハ研究の魅力や真髄といったものを感じさせる名論である。小林義武や⁴²、クリストフ・ヴォルフの近著に概略が述べられているし⁴³、本論でもたびたび言及してきたので、ここでの総括は控える。

ペータース社から1997年に出たC. ヴォルフ版では、スメントの過ちを正すという点に重点が置かれ、裏表紙に以下の四点が強調されている：

1. この楽譜は、バッハの自筆譜スコアの1750年以前の形を基にしており、後の世代による改訂は排除した。
2. 第1部の《ミサ曲》に関しては、ドレスデン・パート譜の情報、特にアーティキュレーション、装飾、テンポ、スコアリングを尊重した。
3. 第2部の《ニカイア信条》にては、自筆譜スコアの通奏低音に付けられたエマヌエル・バッハの数字を取り入れた（バッハは数字を書き込まなかった）。
4. 更なる細かいスコアリングや楽器指定などの、バッハが書き込まなかったところは、バッハの実践例から補った。

この段階のヴォルフの研究では、第1点と第3点にて言及された筆跡の問題、つまりバッハ自身によ

る改訂かどうか、という点には甘さが残り、後にリフキンとU.ヴォルフによって否定されることになるが（譜例7を参照）、残りの点においては、今日においても貴重な研究貢献として認められている。



譜例7：〈エト・イン・スピリトゥム〉 第61-62小節の修正

注：リフキンとU.ヴォルフは、「cum」に付けられたナチュラル（*lg*）と「Pa-」に付けられたシャープ（*#A*）はバッハによるものではないと結論づけており、それぞれの出版譜からは除外されている。それ以前の版では、ネーゲリとジムロックは改訂前の形、リーツ版（改訂版）とC.ヴォルフ版では、両方の臨時記号がとり入れられ、スメント版ではシャープのみが取り入れられている。ホ長調からロ短調に転調する狭間のパッセージにて、和声の扱い（対斜の処理を含めて、和声の変動を減らす）とバス声部の旋律形（長七度から減七度の跳躍への変更）という二点を考慮したであろうエマヌエル・バッハ（？）の判断はとても興味深い。

リフキン版とU.ヴォルフ版の拮抗

リフキン版は、バッハが自筆譜スコアにて最終的に到達した稿をこの作品の唯一の意図とみなし、ドレスデン・パート譜からの情報はテキストに取り入れずに編集を行っている。リフキンの最も顕著な貢献は、筆跡鑑定と初期の筆写譜との資料批判を通してバッハの死後に加えられた変更を極力見つけ出し、現在では判読不可能になっている箇所を読み解いていることである。また、編集においてスラーなど細部にまでバッハが完璧に補足していなかった箇所に関しては、点線にて補っているが、ドレスデン・パート譜に出ている情報と重なるところもあり、編集方針に一貫性が欠けているように感じられるという欠点がある。

U. ヴォルフ版には、新しい重要な貢献が二つある。一つは、レントゲン蛍光分析の技術を用い、記譜に使用されたインクを科学的に元素レベルで分析することにより、父と息子が使用したインクの分別を試みたことである⁴⁴。ウヴェ・ヴォルフのもう一つの大きな貢献は、第1部の扱い方に画期的な工夫をしたことである。それは、2つの資料を混交されることなく併記するために、ドレスデン・パート譜からの独立した情報に灰色を使うというものだ。それにより、黒と灰色の両方にて、資料に基づく情報に加え、編集者による補足を各色の点線で独立して示すことが可能となった。しかし、使用者側としては、非常に混み入った情報が詰められているため、読み難い楽譜になってしまっているのが最大の弱点となっている。

リフキンとU. ヴォルフの楽譜の違いは、編集方針によるところが殆どであるが、その他にも、例えば譜例8で示したような、バッハが作曲上苦心をした箇所をどう解釈し再現すべきかといった問題に時折相違がみられる⁴⁵。



譜例8：〈コンフィテオル〉第137－141小節の解読不明の箇所

これまでの印刷譜作成に絡んだ研究の流れを総括すると、前世紀のスメントの研究は問題こそ多かったが、後続の研究の道筋を立てたという点において、非常に大きな貢献であったことは今日誰もが認めるところである。近年の筆跡研究の進展も、更なるテクノロジーの活用が期待される一方、現在解読が不可能な箇所が、将来的にも解読ができるようになるか、また紙の破れや腐敗が進んでしまったバッハの自筆譜が、将来どう分析可能な形で残されてゆくのか、といった新たな問題にも向き合わねばならないであろう⁴⁶。

私たちのとるべきアプローチ

半世紀前にスメントが提唱したところの最大の争点は、《ロ短調ミサ曲》の統一性の問題であった。これは、バッハのこの曲に対する神学的観念という根本的なところよりも、むしろ彼が行った楽譜資料研究の限界が導いた結論であった。バッハの自筆譜スコアでは、第1部の《ミサ曲》が第2部《ニカイア信条》以降の筆跡と異なっており、それぞれのセクションに独自のモデルが存在するということが彼にとっての大きな根拠であった。U. ヴォルフ校訂の新バッハ全集 第II/1a巻（2005年）にて、《ロ短調ミサ曲》としてまとめられる前に存在した稿——1724年の《ザクトゥス》と1733年の《ミサ曲》——が追加出版されたのは、新バッハ全集側は、それらの初稿を独自の作品として認めたということであり、《ロ短調ミサ曲》とは別の作品として認識されるべきだという結論に達したということであろう。

リフキン版は、バッハが遺した《ロ短調ミサ曲》の最終稿の確立を徹底的に追究した批判校訂版である。晩年のバッハの作品への取り組みを明確にするという確固たる理念を掲げ、素晴らしい研究成果を挙げている。とりわけ、これまでに区別のつかなかった数々の修正が、後に次男が書き込んだものであったことを資料学的に立証した功績は大きい。また、スコアに補足的に添えられた作品と資料の概説や各楽章におけるテキストの問題に関する解説からは、バッハの作曲過程の根底にあるのは、いわゆる19世紀的な概念の「作品」ではなく、必要に応じてその形が流動的に変化し、最終的にひとつの大きく統一された形として完成されてゆくというものであり、バッハの作曲・演奏活動が現存する資料に様々な形で断片的に観察される、という興味深い実態が漠然と伝わってくる。パロディー手法もその中の大きな流れで捉えられるべき問題であろう。しかし、それらのテキストに含蓄される作品の生い立ちと、そこから学ぶことができる音楽の深みを、演奏者がどう扱うことができるか、といった非常に重要な問題に関しては、リフキンは言及しない。あくまでもリフキンのスタンスは、バッハの最終稿としての自筆譜スコアが彼の最終意図を最も正確に反映しているという一点にあるのであり、それ以外のアプローチ、例えばC. ヴォルフ版にて行なわれた手法、つまりバッハが過去に考慮した様々な異型を吟味し混交させてひとつの版を作り上げるという編集手法は、明らかに否定している。

純粹に資料学的にみれば、リフキンのアプローチは正統派といえる。バッハが意を決してスケールの大きい作品に取り組んだ時に作曲した《ロ短調ミサ曲》は、自筆譜スコア上にて展開されているのであ

り、そこに含まれた情報や含まれなかった情報も、作曲者であるバッハの選択であり、彼の意図をできるだけ尊重するよう心がけなければならないのは当然である。

しかし同時に、C. ヴォルフやU. ヴォルフのアプローチに見られるところの、バッハの作曲手法と作品の扱い方をより大きな歴史的枠組みから捉え直し、より大きな視点からより立体的な作曲過程と作品のイメージを読もうと努力するという視点もあってよいと思う。楽譜を通じて演奏家にアドバイスをする立場にある音楽学者としては、従来の資料研究の手法が、因習とも形容されかねないほど形骸化してしまっているという危機感を、もっと持つべきだと思う。私たちは、固定観念から逸脱し、新しい楽譜編集のスタンダードを築き上げるために何をすべきかを考える機会がここに与えられていると認識すべきだ。

将来の楽譜に期待されるのは、これまで様々な資料から指摘がなされてきたバッハの作曲過程の全容を読者が理解できるような形で示すことではないだろうか。そこには、初期稿から最終稿までの軌跡が辿れ、それぞれの過程における作品の形とバッハの意図が説明され、また同時に、作品の統一性とは何なのかを明確に示されることが望ましいことだと考える。巻末に補足として初期稿を並べ、異型のリストアップをするという、かつての新バッハ全集で採用されていた批判校訂版の編集方針は、バッハの作曲過程の全容を理解する助けにはなっていない。さらに付け加えるならば、作品の受容、つまりバッハの自筆譜が後世の手に渡り、変更され、新しい歴史の流れから再評価され続けてきたことからの影響が、現在の私たちのバッハ像に少なからず反映しているという事実も認識し、それとどう対峙すべきかも考慮すべき課題である。

バッハ時代に立ち返り、バッハの視点から彼の作品を見直すという過程において、21世紀に生きる私たちがだれもが身近に感じている先入観が、歴史を評価する上での障害にならぬよう、研究者自らが清らかな自覚をもってバッハと正面から向かい合いたいものである。近年に Carus から刊行予定の、ウルリヒ・ライジンガー (Ulrich Leisinger) による批判校訂版に多くを期待したい。

注

¹ この拙論は、2011年11月8日に国立音楽大学にて行った講演と、その後に行われた参加者との議論を基に再構成し加筆したものである。その後も、江端伸昭氏からはバッハ受容史における自筆譜と筆写譜の関係に関する様々な情報を、また澤谷夏樹氏からは楽譜観に関する貴重な意見を頂いたことをここに記し、感謝の意を表したい。

² H.-J. Schulze, 'The B minor Mass - Perpetual Touchstone for Bach Research', P. Williams (ed.), *Bach, Handel, Scarlatti Tercentenary Essays* (Cambridge University Press, 1985), pp. 311–320.

³ これらの例に関しては、音楽研究所年報 第21巻（2009年）における拙論を参照されたい。

⁴ このことは、例えば、マタイ受難曲の後期稿のスコア（1736年）と初期稿（1727/29年）の筆写譜の比較、また、クラヴィーア練習曲集 第2巻からの《フランス風序曲》ロ短調（BWV 831）と、妻のアンナ・マグダレーナの筆写譜にて伝えられているハ短調の初期稿との比較をしてみれば明らかである。

⁵ 参考資料として、現在「バッハ文献集」データベースに登録されている《ロ短調ミサ曲》の出版譜を体系的に分けて年代順に並べたものを付録とした。

⁶ http://imslp.org/wiki/Mass_in_B_minor,_BWV_232_%28Bach,_Johann_Sebastian%29（2012年6月18日にアクセス）

⁷ 注20を参照。

⁸ Georg von Dadelsen, *Beiträge zur Chronologie der Werke Johann Sebastian Bachs*. Tübinger Bach-Studien, IV-V (Trossingen: Hohner Verlag, 1958), pp. 17 and 146 ff; 小林義武の論文 ‘Zur Chronologie der Spätwerke Johann Sebastian Bachs. Kompositions- und Aufführungstätigkeit von 1736 bis 1750’, *Bach-Jahrbuch*, 74 (1988), pp. 7–72 も参照。

⁹ Peter Wollny は、‘Beobachtungen am Autograph der h-Moll-Messe’, *Bach-Jahrbuch*, 95 (2009), pp. 135–152 にて、スコア中にみられる修正にパート譜が作成されようとしていた兆候があることを指摘している。Cf. Christoph Wolff, *Johann Sebastian Bach. Messe in h-moll* (Kassel: Bärenreiter, 2009), pp. 12–13. 邦訳 クリストフ・ヴォルフ、磯山雅訳『バッハ ロ短調ミサ曲』（東京：春秋社、2011年）、pp.9–10。

¹⁰ D-GOI Mus. 2° 54c/3. See Peter Wollny, ‘Ein Quellenfund zur Entstehungsgeschichte der h-Moll-Messe’, *Bach-Jahrbuch*, 80 (1994), pp. 163–169.

¹¹ D-B, Mus. ms. Bach P 13.

¹² Friedrich Smend, ‘Bachs h-moll-Messe. Entstehung, Überlieferung, Bedeutung’, *Bach-Jahrbuch*, 34 (1937), pp. 1–58.

¹³ Alfred Dürr, ‘Zur Parodiefrage in Bachs h-Moll-Messe: Eine Bestandsaufnahme’, *Die Musikforschung*, 45/2 (April-Juni 1992), pp. 117–138.

¹⁴ この点は、Christoph Wolff, *Johann Sebastian Bach. Messe in h-moll* (Kassel: Bärenreiter, 2009), pp. 133–135. [邦訳 クリストフ・ヴォルフ、磯山雅訳『バッハ ロ短調ミサ曲』（東京：春秋社、2011年）、pp. 171–173] にてうまく纏められている。

¹⁵ スメントは、〈エト・インカルナトゥス〉のテキストを除かない状態の〈エト・イン・ウーヌム〉を維持しつつ、バッハが新たに挿入した〈エト・インカルナトゥス〉も採っている。バッハが同じテキストを二度使用する例は〈エト・エクスペクト〉でも見られるが、後者には確固とした神学的メッセージが感じられかつ継続したドラマの一環であるので、同一視はできない。また、ヘンゲルとハウテンは、バッハの変更は、カトリックだけでなくルター派の礼拝でも使えるようにするところに意義があった、という面白い説を主張している。See Eduard van Hengel and Kees van Houten, “Et incarnatus”: an

afterthought? Against the “Revisionist” view of Bach’s B-Minor Mass’, *Journal of Musicological Research*, 23/1 (2004), pp. 81–112.

¹⁶ この記述は修正されており、シュルツェは 19 世紀の中ごろにドレスデン宮廷図書館長であったモルゲンロート (Franz Anton Morgenroth, 1780–1847) により追加されたものと推測している。

¹⁷ *Missa h-Moll, BWV 232-I / Johann Sebastian Bach*. Faksimile Nach dem Originalstimmensatz der Sächs. Landesbibliothek Dresden. Mit einem Kommentar von Hans-Joachim Schulze (Leipzig: Zentral-Antiquariat der DDR; Neuhausen-Stuttgart: Hänssler, 1983), p. 9.

¹⁸ 注 16 を参照。

¹⁹ ドレスデン・パート譜の解説 (注 17)、p. 6 を参照。

²⁰ ドレスデン宮廷オーケストラのチェリストであったロッシ (Agostino Antonin Rossi) が先急ぎする傾向にあった (?) のをバッハが知っていたのであろうか。

²¹ フランス人のブッフアルダンであったからこそ、フランス風味を醸し出すロンバルディア・リズムの追加に深い意味があったのではないだろうか。さらに憶測を進めれば、第二フルートを担っていた名手クヴァンツ (Johann Joachim Quantz, 1697–1773) とユニゾンをさせてはいけなかったという状況も別にあったのかもしれない。彼はブッフアルダンの弟子であり、1740 年にはベルリンのフリードリヒ大王の下へ移籍することになる。ドレスデン宮廷楽団のメンバーについては、Janice Stockigt, ‘Consideration of Bach’s Kyrie e Gloria BWV 232¹ within the Context of Dresden Catholic Mass Settings, 1729–1733’, Yo Tomita, Elise Cream and Ian Mills (eds.), *International Symposium: Understanding Bach’s B-minor Mass. Discussion Book 1. Full Papers by the Speakers at the Symposium on 2, 3 and 4 November 2007* (Belfast: School of Music and Sonic Arts, Queen’s University Belfast, 2007), pp. 52–92 を参照。

²² 現在は、三冊に分けられて保管されている。D-B, Mus. ms. Bach P 572 (第 1 部)、P 23 (第 2 部)、P 14 (第 3 – 4 部)。

²³ 《平均律クラヴィーア曲集》や《無伴奏ヴァイオリン・ソナタとパルティータ》を含め、バッハの主要作品を広めるという役割を担ったキルンベルガー貢献はとても大きい。

²⁴ D-B, Am.B.3。最近ライジンガーにより明らかになったハイドンが所有していた筆写譜 (Anon.403 の手による)。Cf. Ulrich Leisinger, ‘Viennese Traditions of the Mass in B Minor’, Yo Tomita, Elise Cream and Ian Mills (eds.), *International Symposium: Understanding Bach’s B-minor Mass. Discussion Book 1. Full Papers by the Speakers at the Symposium on 2, 3 and 4 November 2007* (Belfast: School of Music and Sonic Arts, Queen’s University Belfast, 2007), pp. 278–285。また、1833 年にスコアの初版譜を出版したネーグリが使ったモデル (少なくともミサの前半) も、このキルンベルガーの筆写譜に由来することが知られている。Cf. *NBA II/1 Kritischer Bericht*, p. 59。ネーグリの出版譜は、表紙に「自筆譜を基に彫った nach dem Autographum gestochen」と謳っている (付録 1.1 参照)。彼は、1805 年頃からバッハの自筆譜を所有していたはずである (注 31 を参照) が、その史実と楽譜の内容が整合しないのは、いったい何を物語っ

ているのであろうか。彼が自筆譜を手に入れる前に、既に第1部《ミサ曲》の出版譜の準備が進められていたものであろうか。それとも、後に別ルートで入手した筆写譜を版下として使用したことによる不具合であったのであろうか。

²⁵ Georg von Dadelsen, 'Friedrich Smend's Ausgabe der h-moll-Messe von J. S. Bach', *Die Musikforschung*, 12/3 (Juli-September 1959), pp. 315–334. 英訳は、James A. Brokaw II. (trans.), 'Friedrich Smend's Edition of the B-minor Mass by J. S. Bach', *Bach*, 20/2 (Summer 1989), pp. 49–74. Repr. Yo Tomita and Tanja Kovačević (eds.), *International Symposium: Understanding Bach's B-minor Mass. Discussion Book 2: Resource Book* (Belfast: School of Music and Sonic Arts, 2007), pp. 404–424 and Yo Tomita (ed.), *Bach* (Farnham: Ashgate Publishing, 2011), pp. 307–327.

²⁶ プログラムの複製は、*NBA II/1 Kritischer Bericht*, p. 39 を参照。

²⁷ 2007年に新しいインク分析法を使ってバッハの自筆譜の精査を行ったウヴェ・ヴォルフによると、インク分析の技術が将来かなり進んだとしても、バッハの元来のテキストを完璧に再構築することは難しいとのことだ。Uwe Wolf, *International Symposium on Bach's B-minor Mass, Belfast 2007* にての質疑応答より。議論は後述の「リフキン版とU.ヴォルフ版の拮抗」を参照。

²⁸ コンサート評は、*Hamburger Correspondent* (11 April 1786), repr. *Bach-Dokumente* III/911, p.421; *NBA II/1 Kritischer Bericht*, pp. 39–43 を参照。英訳は、John Butt, *Bach: Mass in B minor* (Cambridge: Cambridge University Press, 1991), pp. 27–28; George Stauffer, *Bach: The Mass in B Minor* (New York: Schirmer Books, 1997), p. 185; and Hans T. David and Arthur Mendel (eds.), and Christoph Wolff (rev. enl.), *The New Bach Reader. A Life of Johann Sebastian Bach in Letters and Documents* (New York: W. W. Norton, 1998), no. 367, p. 371. 和訳は、クリストフ・ヴォルフ、磯山雅訳『バッハ 口短調ミサ曲』（東京：春秋社、2011年）、p. 45。

²⁹ Yo Tomita, 'Bach's Credo in England: an early history', in Anne Leahy and Yo Tomita (eds.), *Bach Studies from Dublin: Selected papers presented at the ninth biennial conference on Baroque music, held at Trinity College Dublin from 12th to 16th July 2000*. *Irish Musical Studies*, VIII (Dublin: Four Courts Press, 2004), pp. 205–227.

³⁰ *NBA II/1 Kritischer Bericht*, pp. 57–58.

³¹ 正確な日付はわかっていない。バッハの自筆譜は、エマヌエル・バッハの娘（Anna Carolina Philippina Bach, 1742–1804）の死後、翌年の5月に催された競売に出され、そのカタログ *Verzeichniß von auserlesenen, gut conditionirten, zum Theil sauber gebundenen, meistens neuen Büchern und kostbaren Werken aus allen Theilen der Künste und Wissenschaften und in mehreren Sprachen, welche nebst den Musikalien aus dem Nachlasse des seel. Kapellmeisters Bach wie auch einer Sammlung von Kupferstichen [...] Den 4ten März 1805 in Hamburg im Einbeckischen Hause öffentlich verkauft werden sollen*. Hamburg: gedr. in der Börsen-Halle von Conrad Müller, 1805 の p. 34 の第126番に「Die große Catholische Messe.」としてリストされている。ネーグりが1818年に出した広告（注32を参照）と、後にジムロックへ宛てた1832年7月21日付けの書簡（Cf. *NBA II/1 Kritischer Bericht*, p. 404.）からは、「Schwencke 氏の仲介で . バッハの息子

(C.P.E. Bach) の遺産から手に入れた」という情報が得られるが、エマヌエル・バッハの後継者となった Christian Friedrich Gottlieb Schwencke (1767–1822) がこの楽譜を入札したという客観的な文書記録は知られていない。よって、ネーゲリがこのスコアを実際に受け取れた時期の解釈には注意を要する。

³² *Ankündigung des größten musikalischen Kunstwerks aller Zeiten und Völker* (Zürich, 1818); facs. repr. *NBA II/1 Kritischer Bericht*, p. 215. Repr. *Bach-Dokumente* VI, C 50, pp. 462–463. 同じ広告は、*Intelligenz-Blatt zur allgemeinen musikalischen Zeitung*, No. 7 (August 1818), col. 28 に再び掲載されている。英訳は Hans T. David and Arthur Mendel (eds.), Christoph Wolff (rev and enl.), *The New Bach Reader: A Life of Johann Sebastian Bach in Letters and Documents* (New York: W. W. Norton, 1998), pp. 506–507、和訳は、クリストフ・ヴォルフ、磯山雅訳『バッハ 口短調ミサ曲』(東京：春秋社、2011年)、pp.47–48。Cf. *Allgemeine Musikalische Zeitung*, 20/29 (22 Juli 1818), col. 531–532. Repr. *Bach-Dokumente*, VI (2007), C 48, p. 460–461.

³³ 最近のシャバリナの研究から、ネーゲリの所有していたバッハの自筆譜が、フランクフルトのシェルブルへ貸し出されていたことが分かったが、そのことが、出版の遅れの原因の一つであったらしい。Cf. Tatiana Shabalina, 'Manuscript score No. 4500 in St. Petersburg: A new source of the B-minor Mass', Y. Tomita, R. Leaver, J. Smaczny (eds.), *Exploring Bach's B-minor Mass* (Cambridge University Press, forthcoming).

³⁴ *NBA II/1 Kritischer Bericht*, p. 58f. ジムロックの楽譜は、当然ながらネーゲリのコピーではなく、独自に入手した筆写譜を基にしている。注 45 を参照。

³⁵ 《口短調ミサ曲》の合唱は第 1 部と第 2 部が 5 声であるが、第 3 部が 6 声、第 4 部が 8 声編成になっている。パート譜の初版譜は 5 冊が 1 セットとなっており、第 3 部以降は、あるパートは 2 段構えの楽譜のレイアウトになっており、2 人分のパートをカバーしている。このレイアウトは、約 1900 年ごろに Breitkopf が出したものも同様である。

³⁶ 出版の詳しい時期に関しては、Whistling と Adolf Hofmeister の月間レポート *Musikalisch-literarischer Monatsbericht über neue Musikalien, musikalische Schriften und Abbildungen* (1829–1907) を参考にした。<http://www.onb.ac.at/sammlungen/musik/16615.htm>

³⁷ 'Lieber Hauser, wie fange ich's denn an, eine Abschrift der Bachscen *Hmoll*-Messe zu bekommen? *Kyrie* und *Gloria* ist gedruckt, aber so scheußlich daß man's nicht mag. Wenn Sie mir's in Wien besorgen könnten, ich möcht's gern bezahlen. Mendelssohn hat sie auch, aber Gott weiß ann [wann!] der in unsre Nähe oder nach Berlin zurückkommt. ...' A. Schöne, *Briefe von Moritz Hauptmann, Kantor und Musikdirektor an der Thomasschule zu Leipzig, an Franz Hauser* (Leipzig: Breitkopf & Härtel, 1871), vol. II, p. 17–19 at p. 18 より抜粋。

³⁸ ネーゲリのスコアは当初三分割にて出版されることになっていたようだ。イギリスの雑誌 *Musical World* 8/97 (New Series, 1/3) (19 January 1838), p. 47 に、ネーゲリのロンドン・エージェントであったグスタフ・アンドレ Gustav André (1816–1874) が広告をだしているが、それによると、第二分割分は 1838 年 3 月に予定されていた。(当初は、1834 年のイースターであったことが、第一分割分のカバー表紙から分かる。付録の 1.1 を参照。) 同年の 8 月に出された広告には、まだ予約を受け付け中で、第三分

割分は同年 12 月に出版予定である、と告知している。実際には、予定を大幅にオーバーし、二分割で出版された。

³⁹ 現在古本マーケットで流通している楽譜や、世界各地の図書館に所蔵されているサンプルから漠然と受ける印象である。

⁴⁰ 現在図書館などで閲覧できる旧バッハ全集の殆どは、この改訂版の方である。この版はプレート番号に「+」が追加されているので、一目瞭然で分かる。付録の 1.3 を参照。

⁴¹ 注 25 を参照。

⁴² 小林義武、『バッハ——伝承の謎を追う』（東京：春秋社、1995 年）、p. 277f。

⁴³ クリストフ・ヴォルフ、磯山雅訳『バッハ 口短調ミサ曲』（東京：春秋社、2011 年）、pp. 41, 51–55。

⁴⁴ 彼は、鉛を多く含んでいるインクが父の記譜に見られる特徴と結論づけ、リフキンの査定と殆ど同じ結果を導き出しているところに注目したい。この分析は、70 ミクロンという非常に限られた範囲を計るため、ページ全体に分布しているだろう改訂跡を完全な形で把握できなかつたところに限界がある。詳細は、Uwe Wolf, Oliver Hahn and Timo Wolff, 'Wer schrieb was? Röntgenfluoreszenzanalyse am Autograph von J. S. Bachs Messe in h-Moll BWV 232', *Bach-Jahrbuch*, 95 (2009), pp. 117–134 を参照。

⁴⁵ この解釈上の論争は、リフキンの論文 'Blinding Us with Science? Man, Machine and the Mass in B Minor', *Eighteenth-Century Music*, 8/1 (March 2011), pp. 77–91 と、U. ヴォルフの 'Many Problems, Various Solutions: Editing Bach's Mass in B Minor', Y. Tomita, R. Leaver, J. Smaczny (eds.), *Exploring Bach's B-minor Mass* (Cambridge University Press, forthcoming) を参照されたい。補足になるが、ここのテノールは、ネーゲリでは自筆譜の読みではなく Am.B.3 を踏襲し、ジムロックは自筆譜の最下部に追加されている読みを踏襲している。

⁴⁶ バッハ・デジタル・プロジェクトにより、高解像度のカラーสキャンが作成されたが、将来の研究のためには、もっと別の分子レベルのコピーが作成されねばならないであろう。

《口短調ミサ曲》の出版譜

富田 庸

1. スコア (フルサイズ)	11 点
2. ミニチュア・スコア	7 点
3. ピアノ伴奏付き合唱譜 (スコア)	16 点
4. パート譜 (合唱、オーケストラ・パート、オルガン・チェンバロ)	15 点
5. 全曲のアレンジ	1 点
6. 抜粋譜・アレンジ物 (1950 年まで)	30 点
7. 自由なアレンジ・独自の作品 (1900 年まで)	3 点

1. スコア (フルサイズ)

- [Nägeli, Hans Georg (ed.)]: [表紙カヴァー] *MESSE VON IOHANN SEBASTIAN BACH: NACH DEM AUTOGRAPHUM GESTOCHEN*. Erste Lieferung. Die zweite Lieferung wird spätestens zur Ostermesse 1834 sammt einem Haupttitel, Umschlag und Subscribenten-Verzeichniss geliefert. – Die Subscription à 8 Reichsthaler fürs Ganze bleibt bis zur Erscheinung der zweyten Hälfte offen. Der nachherige, Ladenspreis wird auf 12 Reichsthaler fergesetzt. Eigenthum des Verlegers. .. - Zürich bey Hans Georg Nägeli; Bonn bey N. Simrock. 1833. 95p. Pl.-Nr. 6. [BWV 232^Iのみ。表紙頁は無し] [I Lieferung of later imprint by Simrock (1853) has Pl.-Nr.: 5414 and in 93p.]
- [Nägeli, Hans Georg (ed.)]: [表紙カヴァーと表紙頁] *Die hohe Messe in H-moll. von JOH. SEB. BACH. nach dem Autographum gestochen*. PARTITUR II Lieferung. Preis 60 Frs. Complet. Bonn bei N. Simrock; Zürich bei H. G. Nägeli. 1845. 3-95p. Pl.-Nr. 4377. [BWV 232^{II-IV}のみ]
- [Rietz, Julius (ed.)]: *Joh. Seb. Bach's Messe H moll*. Herausgegeben von der Bach-Gesellschaft zu Leipzig. - Leipzig: Breitkopf & Härtel. 1856. xxvii, 306p. Pl.-Nr.: B.W. VI.; Rev. edn. (of BWV 232^{II-IV}) 1857. Pl.-Nr.: B.W.VI.+.
- [Jadassohn, Salomon (ed.)]: *Die Hohe Messe in H moll von Joh. Seb. Bach. Partitur* [nach der Ausgabe

- der Bach-Gesellschaft]. Hierzu Orgelstimme von S. Jadassohn. - Leipzig: C. F. Peters, [1866]. 219p. Pl.-Nr. 4536; later edn. with Ed.-Nr. (= Edition Peters, 24) - later still, with Vorwort von Hermann Keller datiert Stuttgart, Juli 1956. 221p. Ed.-Nr.: EP 24. Pl.-Nr. 4536 [Jadassohn's Orgelstimme is not known]
5. [Rietz, Julius (ed.)]: *Messe in h moll (Sopr., Alt-, Te., Bass-Solo und gemischten Chor) / Joh. Seb. Bach.* Hrsg. von der Bach-Gesellschaft. [Einzel-Ausgabe] - Leipzig: Breitkopf & Härtel, [c.1890] 304p. Pl.-Nr.: B.W.VI. (= Joh. Seb. Bachs Werke ; Breitkopf und Härtels Partitur-Bibliothek, Nr. 3065)
 6. Kretzschmar, Hermann (ed.): *Hohe Messe in H moll von Joh. Seb. Bach.* Für die Aufführung des Riedelvereins eingerichtet von Hermann Kretzschmar. [Partitur; Mit 'Vorwort', 'Leipzig 1899'] - Leipzig: Breitkopf & Härtel, 1899 [R/1927]. 271p. Pl.-Nr.: Part.B. 629. (= Breitkopf & Härtels Partitur-Bibliothek, 629)
 7. Smend, Friedrich (ed.): *Missa. Symbolum Nicenum. Sanctus. Ossana, Benedictus, Agnus Dei et Dona Nobis Pacem. - später genannt: Messe in h-Moll. BWV 232 / Johann Sebastian Bach.* Hrsg. von Friedrich Smend. - Leipzig: VEB Deutscher Verlag für Musik; Kassel [u.a.]: Bärenreiter, 1954. v, 288p. - 2/1964, 3/1976, 4/1980, 5/1986, 6/1996. Ed.-Nr.: BA 5001. (= Johann Sebastian Bach. Neue Ausgabe Sämtlicher Werke. Hrsg vom Johann-Sebastian-Bach-Institut Göttingen und vom Bach-Archiv Leipzig. Serie II: Messen, Passionen und Oratorische Werke. Band 1)
 8. Wolff, Christoph (ed.): *Messe in H-Moll = Mass in B Minor. BWV 232 für Soli, Chor und Orchester / Johann Sebastian Bach.* Nach den Quellen herausgegeben von Christoph Wolff. Partitur / Score. Urtext. - Frankfurt/M., Leipzig, London, New York: C. F. Peters, 1997. 408p. Pl.-Nr.: 31771. (= Edition Peters, 8735)
 9. *Wolf, Uwe (ed.): *Frühfassungen zur h-Moll-Messe / Johann Sebastian Bach.* Missa, BWV 232^I, Fassung von 1733: Kyrie, Christe, Kyrie, Gloria, Et in terra pax, Laudamus te, Gratias agimus tibi, Domine Deus, Qui tollis, Qui sedes, Quoniam tu solus sanctus, Cum Sancto Spiritu - Credo in unum Deum, BWV 232^{II}/1, Frühfassung in G - Sanctus, BWV 232^{III}, Fassung von 1724. Hrsg. von Uwe Wolf. - Kassel [u.a.]: Bärenreiter, 2005. xii, 168p. Ed.-Nr.: BA 5293. (= Johann Sebastian Bach. Neue Ausgabe Sämtlicher Werke. Hrsg vom Johann-Sebastian-Bach-Institut Göttingen und vom Bach-Archiv Leipzig. Serie II: Messen, Passionen und Oratorische Werke. Band 1a) [《口短調ミサ曲》と独立して伝承している初期稿を集めたもの]

10. Rifkin, Joshua (ed.): *Messe h-moll ; Mass in B minor. BWV 232 / Johann Sebastian Bach (1685-1750)*. Herausgegeben von / edited by Joshua Rifkin. Partitur / Score. - Wiesbaden [u.a.]: Breitkopf & Härtel, 2006. xviii, 273p. Pl.-Nr.: Breitkopf PB 5363. ISMN: M-004-21170-0. (= Breitkopf & Härtel Partitur-Bibliothek, 5363)
11. Wolf, Uwe (ed.): *Messe in h-Moll: BWV 232 / Johann Sebastian Bach*. Hrsg. von Uwe Wolf. rev. Ed. - Kassel [u.a.]: Bärenreiter, 2010. xxxvii, 356p. (= Neue Ausgabe sämtlicher Werke / Johann Sebastian Bach. Revidierte Edition. Hrsg. vom Bach-Archiv Leipzig, 1)

2. ミニチュア・スコア

1. Volbach, Fritz (ed.): *Die hohe Messe in H moll von Johann Sebastian Bach*. [Studienpartitur] nach Ausgabe der Bach-Gesellschaft. Mit einem Vorwort von Fritz Volbach. - Leipzig: Eulenburg, [1913] viii, 352p. Best.-Nr.: Eulenburgs kleine Partitur-Ausgabe [959] (= Chorwerke, 9)
2. Volbach, Fritz (ed.): *Die hohe Messe in H moll ...* [Studienpartitur] nach der Ausgabe der Bach-Gesellschaft revidiert und mit Vorwort versehen von Fritz Volbach. - Leipzig: Eulenburg, [c.1920] xiv, 352p. Best.-Nr.: Eulenburgs kleine Partitur-Ausgabe No. 959; Pl.-Nr.: E.E. 3999.
3. Smend, Friedrich (ed.): *Missa symbolum Nicenum, Sanctus, Osanna, Benedictus, Agnus Dei et Dona nobis pacem ; später genannt: Messe in h-Moll ; BWV 232 / Johann Sebastian Bach*. Hrsg. von Friedrich Smend. [Studienpartitur, unveränd. Abdr. des Bd. II/1 der NBA] - Leipzig: Dt. Verl. für Musik, 1955. xii, 288p. Verl.-Nr.: DVfM 5001b; Kassel [u.a.] Verlag Bärenreiter, [1971]. xii, 288p. (= Bärenreiter Taschenpartituren, 1)
4. [anon. (ed.)]: *High mass in B minor / Johann Sebastian Bach*. - New York: Edwin F. Kalmus, [1968]. 306p. (= Kalmus miniature orchestra scores, no. 408)
5. Wolff, Christoph (ed.): *Messe in h-Moll. BWV 232 ; für Soli, Chor und Orchester = Mass in b minor / Johann Sebastian Bach*. Nach den Quellen hrsg. von Christoph Wolff. [Studienpartitur, Urtext] - Frankfurt [u.a.]: C. F. Peters, c1997. 408p. Ed.-Nr. EP 8735a. Pl.-Nr. 31771. ISMN: M-014-10412-2.
6. Rifkin, Joshua (ed.): *Messe h-moll ; Mass in B minor. BWV 232 / Johann Sebastian Bach*. herausgegeben von / edited by Joshua Rifkin. [Studienpartitur / Study Score]. - Wiesbaden [u.a.]: Breitkopf & Härtel,

c2008. xxv, 253p. Pl.-Nr.: Breitkopf PB 5303. ISMN: M-004-21196-0. (= Breitkopf & Härtel Partitur-Bibliothek, 5303)

7. Wolf, Uwe (ed.): *Messe in h-Moll = Mass in B minor. BWV 232. / J. S. Bach*. Herausgegeben von Uwe Wolf. Urtext der Neuen Bach-Ausgabe - Revidierte Edition. - Kassel [u.a.]: Bärenreiter, 2010. xxviii, 279p. Best.-Nr.: TP 1232. ISMN 979-0-006-20526-4.

3. ピアノ伴奏付き合唱譜 (スコア)

1. Marx, Adolph Bernhard (ed.): *Die Hohe Messe in H-moll von Joh. Seb. Bach für zwei Sopran, Alto, Tenor und Bass*. Im Clavierauszug von Adolph Bernhard Marx. (Preis des Clavierauszugs Fr. 20, Preis der 5 Chorstimmen Fr. 11.75Cs) - Bonn, bei N. Simrock; Zürich bei H.G.Nägeli, [1834, R/1840?]. 126p. (= Kirchen-Musik, Band 3.) Pl.-Nr.: 3038 [later imprint has a slightly differently-worded, simpler title-page without Nägeli's name]
2. Stern, Julius (ed.): *Die hohe Messe (H-moll) von Johann Sebastian Bach*. Clavier-Auszug und Stimmen nach dem Original hrsg.von Julius Stern - Berlin: Bote & Bock, [1860]. 247p. Pl.-Nr.: B. & B. 4704. (= Collection des oeuvres classiques)
3. Ulrich, Hugo (ed.): *Messe in H moll von J. S. Bach*. Clavierauszug von Hugo Ulrich. - Leipzig: C. F. Peters, [1864]. 174p. Pl.-Nr.: 4397 (= Joh. Seb. Bach's Oratorien und Messen im Klavierauszug); another edn.: Leipzig u. Berlin: C. F. Peters, Bureau de Musique (= Opern und Oratorien im Klavier-Auszug mit Text bearbeitet von Brissler, Horn, Stern, Ulrich. Arrangement, Eigenthum des Verlegers)
4. [anon. (ed.)]: *Die hohe Messe : in H moll von Joh. Seb. Bach*. Clavierauszug. - Braunschweig ; New York: Henry Litolf's Verlag, [1872]. 176p.
5. Rösler, Gustav (ed.): *Die Hohe Messe in H moll von Joh. Seb. Bach*. Klavierauszug von Gustav Rösler - Leipzig [u.a.]: C. F. Peters, [1876]. 155p. Pl.-Nr. 5966; later edn. - Leipzig: C. F. Peters, [1896]. 163p. Pl.-Nr. 8246; Ed.-Nr. EP 37.
6. [anon. (ed.)]: *H moll-Messe ; Messe en Si mineur ; Mass in B minor*. Clavier-Auszug mit Text. - Braunschweig [u.a.]: Henry Litolf, [c.1885]. 176p. Best.-Nr. Collection Litolf No. 222. [Titelaufgabe von Ausg. 1872?]

7. Sullivan, Arthur (ed.): *Mass in B Minor ; in Vocal Score ; composed by John Sebastian Bach*. [With 'Note' by Arthur Sullivan, 'October, 1886'] - London & New York: Novello, Ewer and Co., 1886. 202p. - [With 'Historical Notes' by F. G. Edwards, 'October, 1907' together with Sullivan's 'Editorial Note' of October, 1886 and further note dated Feb. 1908] London: Novello and Co., 1909. 202p.

8. Spengel, Julius (ed.): *Hohe Messe in H moll*. Klavierauszug von Jul. Spengel, (Unter Benutzung der Orgelstimme und Bezeichnungen von H. Kretzschmar.) - Leipzig: Breitkopf & Härtel [1897], 215p. Pl.-Nr. J.S.B.IV.1. (= Joh. Seb. Bach's Werke ; Messe, 1); repr. 1899, 1927, 1950, 1965, 1998. 215p. Pl.-Nr.: J.S.B. IV. 1. (= Edition Breitkopf Nr. 3105)

9. Damrosch, Frank (ed.): *Mass in B minor: for soli, chorus and orchestra / Johann Sebastian Bach*. Edited by Frank Damrosch. [Vocal score] - New York: Schirmer, 1899. vi, 199p. Pl.-Nr.: 15053. - repr. c1927.

10. Vockner, Josef (ed.): *Die Hohe Messe in H Moll von Joh. Seb. Bach*. Vollst. Klavierauszug mit Text, nach der Partitur revidiert von Josef Vockner. - Wien u. Leipzig: Universal-Edition, Aktiengesellschaft [1904, R/c.1927] 163p. Best.-Nr.: U.E. 853; Pl.-Nr. U.E. 853. (= Universal Edition, No. 853)

11. Müller, Gottfried (ed.): *Missa symbolum Nicenum, Sanctus, Osanna, Benedictus, Agnus Dei et Dona nobis pacem ; genannt: Messe in H-Moll ; BWV 232 / Johann Sebastian Bach*. Klavierauszug von Gottfried Müller. - Leipzig: Dt. Verl. für Musik, 1955. 240p. Verlags- u. Firmen-Nr.: DVfM 5102. - repr. 1971. 240p. Verlags- u. Firmen-Nr.: DVfM 5001a. - another edn. Klavierauszug nach dem Urtext der Neuen Bach-Ausg. von Gottfried Müller. Kassel [u.a.]: Bärenreiter: c1955, [R/2002]. 240p. Verlags- u. Firmen-Nr.: BA 5102a. ISMN: M-006-46415-9. (=Bärenreiter-Urtext)

12. [anon. (ed.)]: *Mass in B minor, for soli, chorus and orchestra : with Latin text / Johann Sebastian Bach*. - New York, N.Y. : Edwin F. Kalmus, [1979?]. 160p. (=Kalmus vocal scores, 6004)

13. Wolff, Christoph; Muntzschick, Johannes (eds.): *Messe h-Moll für Soli, Chor und Orchester. BWV 232 / Johann Sebastian Bach*. Neue Ausgabe nach dem Quellen herausgegeben von Christoph Wolff; Klavierauszug von Johannes Muntzschick. - Frankfurt am Main [u.a.]: C. F. Peters, c1994. [vii], 199p. Pl.-Nr.: 31773 (= Edition Peters, 8736)

14. *Wolf, Uwe; Köhs, Andreas (eds.): *Frühfassungen zur h-Moll-Messe / J.S. Bach*. Klavierauszug von

Andreas Köhs [nach dem Urtext der Neuen Bach-Ausg.] - Kassel [u.a.]: Bärenreiter, c2006. ix, 138p. Best.-Nr. BA 5293a. Pl.-Nr. BA 5293a. ISMN: M-006-53273-5. (= Bärenreiter-Urtext)

15. Rifkin, Joshua; Dürr, Alfred (eds.): *Messe h-moll für Singstimme und Orchester ; BWV 232 / Johann Sebastian Bach*. Hrsg. von Joshua Rifkin. Klavierauszug von Alfred Dürr. - Wiesbaden [u.a.]: Breitkopf & Härtel, c2006. 228p. Best.-Nr.: Edition Breitkopf 8700. Pl.-Nr. Breitkopf EB 8700. ISMN: M-004-18251-2. (=Breitkopf Urtext)

16. Wolf, Uwe; Köhs, Andreas (eds.): *Messe in h-Moll = Mass in B minor. BWV 232 / BACH*. Hrsg. von Uwe Wolf. Klavierauszug: Andreas Köhs. - Kassel [u.a.]: Bärenreiter, 2010. viii, 243p. (= Bärenreiter Urtext)

4. パート譜 (合唱、オーケストラ・パート、オルガン・チェンバロ)

1. [anon. (ed.)]: *CHORSTIMMEN zu der hohen Messe in H-Moll / J. SEB. BACH*. - Bonn: N. Simrock [c.1834] S1 (36p) S2 (27p) A (39p) T (34p) B (36p). Pl.-Nr.: 3038.

2. [anon. (ed.)]: *Messe (H moll) / Joh. Seb. Bach*. Nach der Ausgabe der Bach-Gesellschaft. [Chorstimmen] - Leipzig: Breitkopf und Härtel [1859]

3. [anon. (ed.)]: *Messe (Hm.) / Joh. Seb. Bach*. [Chorstimmen.] - Leipzig: Peters, [1878]

4. [anon. (ed.)]: *Die Hohe Messe H moll von Joh. Seb. Bach*. [Chorstimmen] - Leipzig: Kahnt, [c.1880] 5 St. Best.-Nr. 2455. Pl.-Nr. 2455.

5. Goldschmidt, Otto (ed.): *MASS in B minor (DIE HOHE MESSE in H moll) by John Sebastian Bach*. Edition of the Bach Choir, London. Editor Otto Goldschmidt, 1885. Chorus Parts. [heading description; no title-page] - London: Novello & Co. Engravers & Printers, 1885. 5 St. (Soprano I, 1-20p; Soprano II, 1-20p; Contralto, 1-26p; Tenor, 1-26p; Bass, 1-23p.) Pl.-Nr.: 6877.

6. [anon. (ed.)]: *Hohe Messe H moll / Joh. Seb. Bach*. [Chorstimmen] - Leipzig: Breitkopf & Härtel, [1885] 5 St. (S. I, II, A., T. u. B.) Best.-Nr.: Chorbibliothek 26. Pl.-Nr.: .Ch.B. 26.S.I. ; Ch.B. 26.S.II. ; Ch.B. 26.A. ; Ch.B. 26.T. ; Ch.B. 26.B. (= Breitkopf & Härtels Chorbibliothek, 26)

7. [anon. (ed.)]: *Messe in H moll, Einrichtung für den Philharmonischen Chor, Berlin (Siegr. Ochs) Sopran I,*

Sopran II, Alt, Tenor, Bass. - Leipzig: Breitkopf & Härtel [c.1895] 5 parts. Pl.-Nr.: Ch.B.1285.S.I.; Ch.B.1285.S.II; Ch.B.1285.A.; Ch.B.1285.T.; Ch.B.1285.B.

8. Kretzschmar, Hermann (eds.): *Hohe Messe in H moll / Joh. Seb. Bach.* Für die Aufführung eingerichtet von Herm. Kretzschmar. [Stimmen] - Leipzig: Breitkopf & Härtel, [1899, R/1950] 19 St. Pl.-Nr.: Orch.B. 1095/99.; 17482 (on 1st page of some parts). (= Breitkopf & Härtels Orchesterbibliothek, 1095 a/e)
9. Kretzschmar, Hermann (arr.): *Hohe Messe in H moll von Joh. Seb. Bach.* [Orgelstimme] Orgel. Für die Aufführung des Riedelvereins eingerichtet von Hermann Kretzschmar.- Leipzig: Breitkopf & Härtel, 1899. 81p. Pl.-Nr.: Orch.B. 1095/99. (= Breitkopf & Härtels Orchesterbibliothek, 1095)
10. [anon. (ed.)]: *H moll-Messe: Oratorium von J. S. Bach.* [Chorstimmen] - Leipzig: C. F. Peters, [c.1900] 5 St. Best.-Nr. Ed. Peters 8887. Pl.-Nr. 8887a ; 8887b ; 8887c ; 8887d ; 8887e.
11. Seiffert, Max (ed.): *Hmoll-Messe von Johann Sebastian Bach.* Orgelstimme und Cembalostimme [eingrichtet] von Max Seiffert. (Vorwort 1916) - Leipzig: Edition Peters [1917] 18 St. Pl.-Nr. 7796 ; Cemb. u. Orgel Pl.-Nr. 10057.
12. [anon. (ed.)]: *Messe in h-Moll. BWV 232 / Joh. Seb. Bach.* [Singstimmen] - Leipzig: Dt. Verl. für Musik, 19[55]. 5 St. Best.-Nr.: DVfM 5102. Pl.-Nr.: DVfM 5102
13. Müller, Gottfried (ed.): *Messe in h-Moll. BWV 232 / Johann Sebastian Bach.* Continuo-Aussetzung: Gottfried Müller. [Orchesterstimmen] - Leipzig: Dt. Verl. für Musik, 1955. 16 St. Best.-Nr.: DVfM 5102. Pl.-Nr.: DVfM 5102
14. Wolff, Christoph (ed.): *Messe in h-Moll BWV 232 für Soli, Chor und Orchester / Johann Sebastian Bach.* Hrsg.von Christoph Wolff. [Stimmen] - Frankfurt ; Leipzig ; London [u. a.]: C. F. Peters, c1997. 18 St. ISMN: M-014-10349-1. Best.-Nr.: EP Nr. 8735.
15. Rifkin, Joshua; Dürr, Alfred (eds.): *Messe in h-moll. BWV 232 / J. S. Bach.* Hrsg. von Joshua Rifkin. Continuo-Aussetzung von Alfred Dürr. Stimmen. - Wiesbaden [u.a]: Breitkopf & Härtel, c2006. 17 St. Best.-Nr. Orchester-Bibliothek 5363. Pl.-Nr. Breitkopf OB 5363. ISMN: M-004-33854-4. (=Breitkopf & Härtels Orchester-Bibliothek, 5363)

5. 全曲のアレンジ

1. [anon. (arr.)]: *Hohe Messe in H moll / Joh. Seb. Bach*. Streichquartett. [V. I. Mk 2,40 n. V. II. Mk 2,10 n. Viola Mk 1,50 n. Vcell. u. Bass. Mk 2,40] - Leipzig, Breitkopf & Härtel [1893]

6. 抜粋譜・アレンジ物 (1950 年まで)

1. [Ayrton, William (ed.)]: *Sacred minstrelsy: a collection of sacred music by the great masters of all ages and nations; consisting of anthems, solos, duets, trios, &c., and choruses; with accompaniments for the piano-forte or organ*. [vocal score] 2 vols. - London: John William Parker, 1834-1835. 210, 216p. [Contains 'Quartet, - "Crucifixus." from a MS. Mass, by John Sebastian Bach.' BWV 232¹/5]
2. Gauntlett, Henry John (ed.): *Choral and instrumental fugues of John Sebastian Bach*. In continuation of the English edition of his forty-eight preludes and fugues arranged from his masses litanies oratorios and exercises... [vol.1: Nos. 1-6] by Henry John Gauntlett. - London: C. Lonsdale, [1838]. 26p. Pl.-Nr. 224. [Contains 'Gratias agimus tibi' BWV 232¹/7]
3. [anon. (ed.)]: *Arie [Agnus Dei] für Contra-Alt ; aus d. h-Moll-Messe [von Johann Sebastian Bach]* Berlin, Trautwein, 1842. pp.8-10. (= Auswahl vorzüglicher Musik-Werke in gebundener Schreibart von Meistern alter u. neuer Zeit, 2.2) [BWV 232^{IV}/4]
4. Klage, Carl (ed.): *H moll Messe Qui sedes ad dextram (Der du sitzt) / J. S. Bach*. - Berlin [u.a.]: Schlesinger [u.a.], [1842]. 5p. Pl.-Nr.: 2733. (= Sion: chants religieux pour la voix d'alto, vol.2, no.25) [BWV 232¹/10]
5. Klage, Carl (ed.): *Agnus Dei (O Lamm Gottes) / J. S. Bach*. - Berlin [u.a.]: Schlesinger [u.a.], [1842]. 3p. Pl.-Nr.: 2735. (= Sion: chants religieux pour la voix d'alto, vol.2, no.26) [BWV 232^{IV}/4]
6. Commer, Franz (ed.): *CANTICA SACRA. Sammlung geistlicher Arien für eine Sopranstimme aus dem XVIten-XVIIIten Jahrhundert*. Nach den Original Partituren mit Begleitung des Pianoforte eingerichtet u. herausgegeben von Fr. Commer. - Berlin: T. Trautwein. [1844]. 83p. Pl.-Nr. (Plattendruck): 28. [containing No. 13, 'Aus Einer Messe / von Joh. Seb. Bach' (Qui tollis peccata), BWV 232^{IV}/4]
7. Commer, Franz (ed.): *CANTICA SACRA. Sammlung geistlicher Arien für eine Baßstimme aus dem XVII.*

- und XVIII. Jahrhundert.* Nach den Original-Partituren mit Begleitung des Pianoforte eingerichtet u. herausgegeben von Fr. Commer. - Berlin: T. Trautwein. [1844]. 95p. Pl.-Nr. (Plattendruck): 66 [containing 'Quoniam tu solus sanctus', BWV 232^I/11]
8. Franz, Robert (arr.): *Duett 'Christe eleison' aus der Hohen Messe für zwei Soprano* bearbeitet von Robert Franz. Die Bearbeitung ist Eigenthum des Verlegers. - Breslau, Verlag von F. E. C. Leuckart (Constantin Sander.), [1861]. 12p. Pl.-Nr.: F.E.C.L. 1475. (= Duette aus verschiedenen Cantaten und Messen mit Begleitung des Pianoforte / Joh. Seb. Bach, No.2) [BWV 232^I/2]
 9. Franz, Robert (arr.): *Duett 'Et in unum Dominum Jesum Christum' aus der Hohen Messe für Sopran und Alt* bearbeitet von Robert Franz. Die Bearbeitung ist Eigenthum des Verlegers. - Breslau, Verlag von F. E. C. Leuckart (Constantin Sander.), [1861]. 11p. Pl.-Nr.: F.E.C.L. 1478. (= Duette aus verschiedenen Cantaten und Messen mit Begleitung des Pianoforte / Joh. Seb. Bach, No.5) [BWV 232^{II}/3]
 10. Schaab, Robert (arr.): *Kyrie, Agnus Dei und Dona nobis pacem aus der H-moll-Messe von JOH. SEB. BACH.* Für die Orgel übertragen von Robert Schaab. - Leipzig, Rieter-Biedermann, [1867]. 13p. Pl.-Nr. 520. [BWV 232^I/1, 232^{IV}/4-5]
 11. Best, William Thomas (arr.): *Choral Fugue 'Dona nobis pacem.' From the Mass in B minor. / J. S. Bach.* [arranged for organ by] W.T. Best. - London: Novello, Ewer & Co.[c.1870]. pp.7-9. Pl.-Nr.: 3339. (= Arrangements from the scores of the great masters for the organ by W.T. Best, No. 41) [BWV 232^{IV}/5]
 12. Bibl, Rudolf (ed.): *Harmonium-Album. Sammlung beliebter Tonstücke für Harmonium ...* Bd.9: Bach, Händel. übetr. von E. Stapf [Bd.1-4] u. R. Bibl. [Bd.5-10] - Leipzig: C. F. Peters, [1879]. 39p. Best.-Nr. Ed. Peters 384,1; Pl.-Nr. 6279. [Contains: Chor: Crucifixus. BWV 232^{II}/5]
 13. Franz, Robert (arr.): *Arie für Bass 'Et in unum spiritum sanctum' aus der Messe in H moll / Joh. Sebastian Bach.* Mit Begleitung des Pianoforte. Bearb. von Robert Franz. - Leipzig: Leuckart, [1880]. 10p. [BWV 232^I/7]
 14. Ritter, August Gottfried (arr.): *'Christe eleison' aus der H-moll-Messe / J. S. Bach.* - Magdeburg: Heinrichshofen, [1881] Mk 0,80. (= Odeon. Auserlesene für Sopran und Alt (oder Mezzo-Sopran) mit Pianoforte hrsg. v. A.G. Ritter, No.19) [BWV 232^I/2]

15. Roth, Philipp (arr.): *Arie 'Agnus Dei': H-moll Messe von Joh. Seb. Bach.* Für Violoncell und Pianoforte bearb. von Philipp Roth. - Leipzig [u.a.]: Breitkopf & Härtel: [1884]. 5p + 1 St. Pl.-Nr. 16558. (= Dreissig Arien und Gesangsszenen aus Opern und Oratorien, 2); later edn. [c.1895] Pl.-Nr. V.A.1562. pp.12-15. (= 30 Arien und Gesänge aus Opern und Oratorien für Violoncell und Pianoforte (mit untergelegtem Text) bearbeitet von Philipp Roth, Bd.1, no.3) [BWV 232^{IV}/4]
16. Schaab, Robert (arr.): *Agnus Dei aus der Hohen Messe von J. S. Bach.* Für Orgel eingerichtet von Rob. Schaab. - Leipzig: Kahnt, [1886] 7p. Best.-Nr. 2821. (= Album für Orgel-Spieler. Sammlung von Orgelkompositionen älterer u. neuerer Meister zum Studium und öffentlichen Vortrag, Lief. 82) [BWV 232^{IV}/4]
17. Prout, Ebenezer (arr.): *Choral-Fugue. 'Kyrie eleison' From the Mass in B minor / J. Seb. Bach.* Prepare Gt. 16, 8 & 4 ft. Swell with Reeds, 8 ft. coupd. to Great. Pedal, 16 & 8 ft. not coupd. to Great. [arranged for Organ by Ebenezer Prout] - London: Augener & Co., Beethoven House, 86 Newgate Street, [1883] 3-5p. Pl.-Nr.: A. & Co. No. 300. Stich und Druck von Breitkopf & Härtel in Leipzig. (= Arrangements for the Organ by Ebenezer Prout, No. 11) [BWV 232^I/3]
18. Prout, Ebenezer (arr.): *Aria 'Qui sedes.' From the Mass in B minor. / J. S. Bach.* Prepare Gt. Open Diapason. 8 ft. Choir. Dulciana Swell with Solo Reed, 8 ft. Pedal, 16 & 8 ft. soft. [arranged for Organ by Ebenezer Prout] - London: Augener & Co., Beethoven House, 86 Newgate Street, [1883] 2-5p. Pl.-Nr.: A. & Co. No. 300. Stich und Druck von Breitkopf & Härtel in Leipzig. (= Arrangements for the Organ by Ebenezer Prout, No. 19) [BWV 232^I/10]
19. Gevaert, F. A. (arr.): *TROIS AIRS D'ÉGLISE (agnus dei, qui sedes, esurientes) de Jean Sébastien BACH.* - Paris: Henry Lemoine et Cie, [1886] 1-5, 6-12, 13-17p. Pl.-Nr.: 18903. H. (1); 18903. H. (2); 18903. H. (3) (=Répertoire français de l'Ancien Chant Classique. Morceaux d'Etude et de Concours Pour les Conservatoires et les Écoles de Musique. Recueillis et Annotés par F.-A. Gevaert, No. 351-353, Contralto) [BWV 232^{IV}/4, 232^I/10, 243/9] [Contains: Agnus Dei & Qui sedes, BWV 232^{IV}/4 & ^I/10, 243/9]
20. Schwalm, Robert (arr.): *Hohe Messe und Pfingstcantate. / J. S. Bach.* CHOR: 'Gloria in excelsis.' - ARIE: 'Agnus Dei.' - ARIE (aus der Pfingstcantate): Mein gläubiges Herze frohlocke. [Also hat Gott die Welt geliebt] - Leipzig: Steingraber [1894] 2-7p. Pl.-Nr.: 61. Stich u. Druck v. Oscar Brandstetter, vorm. F. W. Garbrecht, Leipzig. (=Oratorien. Paraphrasen für Pianoforte solo. Herausgegeben von Robert Schwalm,

- No. 2) - repr. in: *Classische Hausmusik: für Pianoforte, Op.10, No. 21.* Leipzig: Steingräber [c.1900]
[Extract from BWV 232^I/4+^{IV}/4, 68/2]
21. Jadassohn, Salomon (arr.): *Kyrie Nr. 1 (H moll) aus der Hohen Messe.* Bearb. für Pianoforte zu 4 Händen von S. Jadassohn. - Leipzig: Breitkopf & Härtel [n.d.] (= Johann Sebastian Bach's Werke. Bearbeitungen für Pianoforte zu 4 Händen ; Gesangswerke) [BWV 232^I/1]
 22. Jadassohn, Salomon (arr.): *Christe eleison (A dur) aus der Hohen Messe ...* Bearb. für Pianoforte zu 4 Händen von S. Jadassohn. - Leipzig: Breitkopf & Härtel [n.d.] (= Johann Sebastian Bach's Werke. Bearbeitungen für Pianoforte zu 4 Händen ; Gesangswerke) [BWV 232^I/2 (?)]
 23. Jadassohn, Salomon (arr.): *Kyrie Nr. 2 (D dur) aus der Hohen Messe.* Bearb. für Pianoforte zu 4 Händen von S. Jadassohn. - Leipzig: Breitkopf & Härtel [n.d.] (= Johann Sebastian Bach's Werke. Bearbeitungen für Pianoforte zu 4 Händen ; Gesangswerke) [BWV 232^I/3 (?)]
 24. Kämpf, Karl (arr.): *J. S. Bach-Album: 14 ausgewählte Stücke aus Gesangs- und Instrumentalwerken.* Für Normal-Harmonium. Bearb.: Karl Kämpf. - Berlin: Simon, [c.1900] 21p. Pl.-Nr. C. S. 4133. [Contains: Chor: Crucifixus, BWV 232^I/5]
 25. [anon. (ed.)]: *Chorus--'Cum sancto spiritu.'* - London: Novello [c.1900]. 16p. Pl.-Nr.: J. S. Bach--Mass in B minor. - Novello, Ewer and Co.'s Octavo Edition. (= Novello's Octavo Choruses, No. 835) [BWV 232^I/12]
 26. Voigt, Woldemar; Mezger, Martin (arr.): *'Sanctus' aus Messe D-Dur / Joh. Seb. Bach.* Für den prakt. Gebrauch bearb. v. W. Voigt u. M. Mezger. [Partitur, Org. u. Cemb. St., 4 Chorstimmen, 13 Orchst.] - Stuttgart: Berthold & Schwerdtner [1922] [BWV 232^{III}]
 27. [anon. (ed.)]: *Cruxifixus (Mass in B minor).* ... London: Novello, 1923. pp.[118]-134. Pl.-Nr.: J. S. Bach—Mass in B minor, - Novello, Ewer and Co.'s Octavo Edition. (= Novello's Octavo Choruses, No. 720.) [BWV 232^I/5]
 28. Willner, Arthur (arr.): *Berühmte Chorwerke ... I. Heft. ... h-Moll-Messe / Weihnachtsoratorium / Johannespassion ; Piano solo / J. S. Bach.* Klaviersatz von Arthur Willner. - [Wien:] Universal-Edition, [1926]. 20p. (pp.22-40) Pl.-Nr. C.C. 98. (= Corona-Collection, 98). [Contains: 'Introduction' (BWV 232^I/1);

'Arie "Qui sedes"' (BWV 232^I/10); 'Chor "Crucifixus"' (BWV 232^{II}/5); 'Arie "Agnus Dei"' (BWV 232^{IV}/4)]

29. Diack, John Michael (ed.): *Blessed is He. = 'Benedictus.' Tenor. From the 'Mass in B minor.' / J.S. Bach.* Arranged by J. Michael Diack. - Glasgow: Paterson's Publications, 1931. 1-4p. (= Solos from the Cantatas Sacred and Secular, No.63) [BWV 232^{IV}/2]
30. Williams, W. S. Gwynn (ed.): *Dona nobis pacem = Grant Thou to us Thy peace = Dyro inni heddwch: chorus for SATB from Mass in B minor / Johann Sebastian Bach.* [Vocal score] edited and translated by W. S. Gwynn Williams. - Llangollen: Gwynn Pub.Co., c.1949. Pl.-Nr.: 3041 G.P.C. [BWV 232^{IV}/5]

7. 自由なアレンジ・独自の作品 (1900年まで)

1. André, Johann Anton: *Crucifixus a canto 1mo e 2do, alto, tenore e basso op. 58: composta sopra il basso continuo di G.S. Bach... da A. André.* - Offenbach s/M: presso Giovanni André, [1830]. [1], 4-7, [1] p. Prezzo f 1. 12 Xr. Pl.-Nr.: 5291. [BWV 232^{II}/5]
2. Liszt, Franz: *Variationen über den Basso continuo des ersten Satzes der Cantate: 'Weinen, Klagen, Angst und Noth sind des Christen Thränenbrod' und des Crucifixus der H-Moll-Messe von Sebastian Bach für Orgel, Harmonium oder Pedal-Flügel gesetzt von ... Franz Liszt.* - Erfurt: bei G. Wilh. Körner, [1865]. 17p. Pl.-Nr. 267. [BWV 12/2 - 232^{II}/5]
3. Thomas, Otto: *Fantasie in Variationenform über ein Thema aus dem Agnus Dei der H-moll-Messe von J. S. Bach. Op. 12.* Für Orgel von Otto Thomas. - Frankfurt a/O.: Bratfisch [1899] [BWV 232^{IV}/4]